

は第六識相應の惑、後三染は第八黎耶識相應の惑にして、麁より細に及ぶの次第なり、故に初三を相應染と云ひ、後三染を不相應染と云ふ、即ち相應とは心王と心所と相應することにて、麁雜なる惑を意味し、不相應とは心王と心所と相應せざることにて、微細なる惑を云ふ、蓋し斷惑の順序次第は始覺の四位の下にて、四相の惑を斷する所に於て述べたる如く、麁なるものより細なるものに及ぶべきなり、喩へば穢れたる物を洗滌するに、鹿き穢れは忽ち除き去るを得るも、細き汚點の如きは、容易に除き去ることを得ざるが如し、今亦然り、麁なるものより斷じ始めて、漸々細なるものに及び、然も斷惑の原理として、麁惑は劣弱なる智慧にて、細惑は勝れたる智慧にて斷するものとす、依て始めは二乗及び三賢位の智慧にて斷じ、其れより地上の菩薩の智慧にて斷じ、終に佛果に至るの順序なり、然して斷惑するに就ては、何れも唯識觀を修す、即ち始め二乗三賢位に於ては、唯識觀中の入空觀を修して我執を斷ず、然も三賢位は地上唯識觀中の法空觀の方便を修學し、初地以上正しく法空觀を修して法執を斷ず、然れども第七地迄は觀に入出あるを以て、有分別の方便加行を以て入觀す、故に論文に第七地を無相方便と云ふ、之れ初地以上七地迄皆方便なるも、終りに就て特に方便と名くるのみ、第八地以上觀に入出なく、任運無功用に修するを以て方便地の名なし、之を要するに、六染は麁

より細に及ぶ斷惑の順序次第を説明するものにして、還滅門に就くものなることを知るべし。

九相五意  
六染を比  
較説明す  
べし

次に前に説明せし三細六麁の九相と、五意并に意識と、今の六染とを比較對照するに、先づ第一に三細六麁五意六染は起信論に於ける法數にして、共に忘るべからざる名所たり、第二に六染は九相中の前六相に當る、即ち前三染は六麁中の前三麁に、後三染は三細に配當すべく、又五意と意識とに該當するを知るべし、策三に九相と五意は細より麁に至る順序なるも、六染は麁より細に至る順序なり、第四に九相は吾人の迷ひ來る順序即ち心性の起動せる過程を説明し、五意と意識は吾人の迷に於ける因縁即ち心性の起動せる因縁を陳ぶるもの、今の六染は斯く縁起されたる迷妄の染心を、菩薩の窮行實踐に依りて、次第に斷破するものなり、第五に斯く九相五意は細より麁に至る順流的向下的墮落的のものなれば流轉門にして、六染は麁より細に至る逆流的向上的開悟的のものなれば還滅門なることを知るべし、第六に九相中の業繫苦相は三界の苦報なれば、結果にして斷すべきものに非ず、然るに今の六染は苦報を招く原因なるを以て、配當すべきものに非ざるや明なり、又九相中の起業相は招く原因に屬すべきも、業にして惑に非ざれば六染に配すべからず、第七に始覺の四位も斷惑に關するや勿論なりと雖も、彼は始覺の



分類にして位次を説くを主眼とし、今の六染は専ら斷惑論に關するものと知るべし、第八に之を要するに、九相五意は生滅流轉の相狀并に因縁を詳述し、六染は轉迷開悟の順序次第を説明するものにして、解脱論を叩き盡せるものと云ふべし。(序論中に出せる法數配當圖参照)。

不了<sup>レ</sup>一法界<sup>ヲ</sup>義者<sup>ハ</sup>從<sup>リ</sup>信相應地<sup>ニ</sup>觀察學斷<sup>シ</sup>入<sup>リ</sup>淨心地<sup>ニ</sup>隨分得離<sup>ル</sup>乃至如來地能究竟離故<sup>ニ</sup>。

和譯 一法界を了せざる義とは、信相應地より觀察學斷し、淨心地に入りて分に隨ひて離るゝを得、乃至如來地に能く究竟して離るゝが故に。

要義 此れより以下、前來陳べし文に就て、重ねて其の要義を了簡する中、先づ根本無明の治斷を説く。

六染即ち枝末無明の斷滅に就ては、既に説明する所あるも、根本無明の斷滅に於ては、未だ其の順序次第を説く所なし、依て今之を説明して曰く、一法界眞如を眞如なりと了知せざる根本無明は、信相應地即ち十住位より觀察修養して、斷することを學びて伏惑し、淨心地即ち初地より一分づゝ無明を離れ、乃至佛果如來地に到りて、能く究竟して離れ、全く斷惑するものとす、蓋し其斷滅の法、前の六染に同じく然も根末治滅俱時な

る所以は、六染一として無明に依らざるものなければなり。

言<sup>フ</sup>相應義者<sup>ハ</sup>謂<sup>ク</sup>心念法異<sup>ナリ</sup>依<sup>テ</sup>染淨差別<sup>ニ</sup>而知相緣相同故<sup>ニ</sup>。不相應義者<sup>ハ</sup>謂<sup>ク</sup>即<sup>チ</sup>心不覺常無<sup>レ</sup>別異<sup>ナリ</sup>不同<sup>ニ</sup>知相緣相<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>。

和譯 相應の義と言ふは、謂く心と念法と異なり、染淨の差別に依て、而も知相と緣相と同じきが故に、不相應の義とは、謂く心に即する不覺にして常に別異なし、知相緣相を同ぜざるが故に。

要義 次に相應と不相應の意義を説く。

六染中前三染には相應と云ひ、後三染には不相應と云ふ、全體相應とは物が二つありて此に相應と云はるゝことにて龜き方、不相應とは之に反して細き方なり、始めに相應の義と言ふは、『心と念法』即ち心とは心王、念法とは心所のことにして、兩者異なれども心王淨なれば心所も淨、心王染なれば心所も染にして、能緣の知相と所緣の緣相と、兩者常に一致し類同するを以て相應と云ふ、又『心念と法』即ち心念とは能緣の心、法とは所緣の境と解するも可なり、此の時は、能緣の心念と所緣の境と兩者異なれども、能緣主觀の染淨に從て、所緣客觀も染淨を現じ、主觀の知相と客觀の緣相と類同するを以て相應と云ふなり、即ち第一は王數釋、第二は心境釋なりと云ふべし。

後に不相應の義と言ふは、『心に即する不覺』即ち眞如の體に離れぬ不覺なり、六染中前



三染は業轉現三細なる阿黎即識の上に更に妄心の加はりたるものなれば、王數相應すれども、後三染は業轉現の阿黎耶識にして、無明が真如に即して最極微細なれば、心王心所の別なし、心王心所別のなきもの、焉ぞ主觀の知相と客觀の緣相との別あらん、別なきもの染淨の類同を論せん、依て之を不相應と云ふ、又「心に即する不覺」即ち真如に離れぬ不覺無明は、其の體彼の妄心と別異なるものに非ず、然も最極微細なれば、外境と相應することなし、斯く心と境と相對せざらんか、焉ぞ主觀たる心の知相と客觀たる境の緣相との別あらん、別なきもの染淨の類同を論せん、依て之を不相應と云ふ、即ち第一は王數釋、第二は心境釋なり。

又染心義者、名爲煩惱礙、能障眞如根本智故。無明義者、名爲智礙、能障世間自然業智故。

和譯 又染心の義とは、名けて煩惱礙と爲す、能く眞如根本智を障ふるが故に、無明の義とは、名けて智礙と爲す、能く世間の自然業智を障ふるが故に。

要義 次に染心を煩惱礙、無明を智礙と名くることを陳ぶ。

染心の義とは上に陳ぶる六染心なり、今之を煩惱礙と名く、煩惱とは煩擾惱亂の義にて湛然寂靜たる眞如平等の理を證る根本智（根本智を眞智、證體智、如理智、實智とも云

ふ）を礙へて起らざらしむ、即ち智淨相を障ゆるものなり、煩惱即礙の持業釋にて、又煩惱障と云ふ、次に無明の義とは根本無明なり、今之を智礙と名く、無明は其の體無智昏迷なれば世間の自然業智を障ゆ、自然業智とは自然に業用を爲す智慧の義にて、眞如を證れる後に、佛が世間の差別界に應じて衆生を濟度する智を云ふ、無明は此の智（根本智に對して後得智と云ひ、又俗智、起用智、如量智、權智とも云ふ）を礙へて起らざらしむ、即ち不思議業相を障ゆるものなり、智之礙の依主釋にて、又所知障と云ふ。

此義云何。以依染心能見能現。妄取境界違平等性故。以一切法常靜無有起相無明不覺妄與法違故。不能得隨順世間一切境界種々知故。

和譯 此の義云何、染心に依て能見能現あり、妄に境界を取て平等の性に違するを以ての故に、一切の法常に靜にして起相あることなし、無明覺せず妄に法を違するを以ての故に、世間一切の境界に隨順することを得て種々に知ることをばざるが故に。

要義 前の説明に對して疑難あり、依て今之を釋す。

前に染心は根本智を礙へ、無明は後得の自然業智を礙ゆと陳ぶ、然るに、染心は庵きゆへ自然業智を礙へ、無明は細きゆへ根本智を礙ゆべき理なり、今之れに反するもの甚だ疑はし、此の義云何と云ふに、先づ染心に就て云へば、染心は六染のことなれば、後三



染は阿黎耶識なり、此の黎耶識の主觀の能見と客觀の能現とあり、此の客觀の能現上に妄に前三染の境界を取著するに至る、斯く主客能所差別するを以て、湛然寂靜なる平等の根本智を礙ゆるなり、後に無明に就て云へば、一切世間の生滅差別法も其の本體たる眞如は、常に靜寂にして起動の相あることなし、然るに根本無明之れを覺知せずして、妄に境界を取著し主客能所差別するに至り、湛然靜寂たる眞如法性に違ふ、若し法性に隨順すれば則ち世間一切の境界を知ることを得べきも、法性に隨順せざるを以て世間一切の境界を種々に知ることを得ず、依て自然業智を礙ゆと云ふなり。

### 一五 生滅の相狀

生滅門を説く中、既に生滅の心と、生滅の因縁とを明したるを以て、以下第三に生滅の相を陳ぶ、生滅の相とは生滅因縁の相狀にて、前に説く九相六染に就て、龜細分別するを云ふ。

復次分別生滅相者有二種。云何爲二。一者龜與心相應故。二者細與心不相應故。

和譯 復次に生滅の相を分別すれば、二種あり、云何が二を爲す、一には龜、心と相應するが故に、二には細

單の龜細分別

心と相應せざるが故に。

要義 先づ生滅の相狀に就て、龜と細の二を分別す。

生滅の相を分別すとは、上の立義分中に、是心生滅因縁相とある相の一字を承げ、廣く之れを説明するものなり、即ち生滅の相狀を分別するに二種とす、一に龜、此は六染中の前三染にして、六識位なれば心王心所相應し、凡夫にても認識することを得る龜顯なるものを云ふ、二に細、此は六染中の後三染にして、阿黎耶識なれば心王心所相應せず、佛菩薩のみ知ることを得る微細のものを云ふ。

又龜中之龜凡夫境界。龜中之細及細中之龜菩薩境界。細中之細是佛之境界。

和譯 又龜中の龜は凡夫の境界なり、龜中の細及び細中の龜は菩薩の境界なり、細中の細は是れ佛の境界なり。

要義 人に就て更に前の龜細を分別す、即ち前は單の龜細にして、今は更に之れを分つがゆへ、復の龜細なり。

龜中の龜は第一染にして、凡夫の境界なり。此に凡夫と云ふも二乘三賢位なり。龜中の細は第二染第三染にして、細中の龜は第四染第五染なり、此の二は十地の菩薩に至て知

復の龜細分別







滅スルニ

和譯 問て曰く、若し心滅せば云何ぞ相續せん、若し相續せば云何ぞ究竟滅と説かん、答て曰く、言ふ所の滅とは唯だ心相の滅なり、心體の滅するに非ず、風の波に依りて動相あるが如き、若し水滅せば則ち風相斷絶して依止する所なけん、水滅せざるを以て風相相續す、唯だ風滅するが故に動相隨て滅す、是れ水の滅するに非ず、無明も亦爾り、心體に依りて而して動す、若し心體滅せば則ち衆生斷絶して依止する所なけん、體滅せざるを以て心相相續するを得、唯だ疑滅するが故に心相も隨ひて滅す、心智の滅するに非ず。

要義 前の滅の義に就て、疑難あるを消釋するなり。

問は心體心相同一門に据りて疑を挾む、即ち無明滅せば不相應心も相應心も滅すと云ふ然らば云何ぞ衆生相續するを得ん、若し無明滅せず衆生相續すと云はゞ云何ぞ究竟滅と説くを得んと、答の意は心體心相同一なりと思ふがゆへ、かゝる疑を生ずと、心體心相非一門に据りて消釋す、即ち言ふ所の滅とは唯だ心相の滅にして心體の滅に非ず、喩へば風の波を動して波を生ずるが如し、若し水滅せんか波は依止する所なくして斷絶すべし、然るに水體滅せざるを以て波は相續せん、唯だ風滅するを以て波隨て滅すべく、然も是れ水體の滅するに非ざるなり、之れと等しく無明も亦心體を起動して衆生を生ず、若し心體滅せんか則ち衆生は依止する所なくして斷絶すべし、然るに心體滅せざるを以

心滅さ相續せば兩立せざるが如し然も矛盾せざる理由

て心相相續するを得ん、唯だ痴無明滅するを以て心相も隨ひて滅すべく、然も是れ本覺真心の智體滅するに非ざるなり。

一六 熏習の四法

上來既に生滅の心と生滅の因縁と生滅の相とを明し、眞如無明黎耶の三法互に關係して、宇宙を開發する義を説明せり、義記に之を總稱して染淨生滅と云ふ、此の染淨生滅に對して染淨互熏あり、蓋し染淨互熏とは、淨の眞如が如何に染の無明を資けて淨法を發するか、染の無明が如何に淨の眞如を資けて妄法を發するかを闡明するものにして、分ちて第一熏習の四法、第二染法熏習、第三淨法熏習の三と爲す、依て今熏習の四法より説明すべし。

復次有ニ四種法熏習義ニ故染法淨法起ニ不斷絶ニ云何爲ニ四ト一者淨法名爲ニ眞如ト二者一切染因名爲ニ無明ト三者妄心名爲ニ業識ト四者妄境界所謂六塵ト

和譯 復た次に四種の法に熏習の義あるが故に染法淨法起て斷絶せず、如何が四と爲す、一には淨法名けて眞如と爲す、二には一切の染因名けて無明と爲す、三には妄心名けて業識と爲す、四には妄境界謂ゆる六塵なり。

要義 熏習の要素は染淨の二法なりと雖も、今染法を三種に分ち、總じて四要素あり

熏習の四要素を問ふ



と説く。

復た次に迷界に於ける染法の流轉と、悟界に於ける淨法の還滅とが、開發生起して斷絶せざる所以如何と云ふに、四種の法が要素となりて、染法淨法互に熏習するに由る、四種の法とは、一に眞如、此は淨法熏習或は眞如熏習と云はれ、眞如淨法の力強くして無明染法を打ち消し、能く悟界諸現象を開展するを云ふ、二に無明、此は無明熏習と云はれ、一切染法の因なり、三に業識、此は業識熏習と云はれ、廣く云へば妄心とて業識並に事識に通ずるも、今其の妄心の根本に就て業識を擧ぐ、四に六塵、此は妄境界熏習と云はれ、迷心の對象たる六塵の境なり、此の三を總じて染法と爲す、染法の力強ければ眞如淨法に熏習して、此に眞如の起動となり、能く迷界の諸現象を惹起す、然して此の四要素之を要するに、初の一は覺にして後の三は不覺なり、然も不覺を開て三と爲すもの如何と云ふに、眞如淨法は本來平等一味なれば分つべきに非ずと雖も、染法不覺は本來自性差別し、彼の一切染法の因たる無明亦然るを以て、今しばらく大別して三種と爲すなり、又染淨二法共に不斷の義を述ぶるも、只之れ一期に就て云ふのみ、其の實を云へば、淨法は無終なれば不斷なるも、染法は有終なれば有斷なりと知るべし。

熏習義者如世間衣服實無於香若人以香而熏習故則有香氣此亦如是

眞如淨法實無於染但以無明而熏習故則有染相無明染法實無淨業但以眞如而熏習故則有淨用。

**和譯** 熏習の義とは、世間の衣類實に香なし、若し人香を以て熏習するが故に則ち香氣あるが如し、此れ亦是の如し、眞如の淨法は實に染なし、但だ無明を以て熏習するが故に則ち染相あり、無明染法は實に淨業なし、但だ眞如を以て熏習するが故に則ち淨用あり。

熏習の義を問ふ

**字義** 熏習とは熏に劇發と與力の二義あり、習に數習と近習の二義あり、畢竟するに或物が一種の作用を起して、屢々他物を刺戟し、或結果を惹起するに至るを云ふ、更に平易に云へば『くすぶりつくる』の意にして、彼の同化とか感化とか云ふ如き、略ば同意味なりと知るべし、而して此の場合に、勢力強き方を能熏と云ひ、勢力弱くして熏習せらるる方を所熏と云ふ、『家語』に、善人と居る、芝蘭の室に入るが如く、久しく其香を聞かず、即ち之と化す、不善人と居る、鮑魚の肆に入るが如し、久しく其臭を聞かず、亦之と化す、と云ふ如き善惡熏習の義を説くものと云ふべし、然して汎く染淨の熏習を論ずるに、習熏と資熏の二種あり、習熏とは内より起りて心體に熏じて染淨を惹起するを云ひ資熏とは外より起りて妄心六塵及び見思の煩惱相資くるを云ふ。

**要義** 上に熏習の四要素を説き、今は熏習の義を陳ぶ。



熏習の義とは譬へば世間の衣服本來實に香氣も臭氣もなし、只香臭を以て熏習するがゆへ、此に香臭を生ずるが如し、彼の僧衣に抹香、醫師に藥香、料理人に魚臭あるが如き是れなり、今亦是の如く、眞如は本來清淨なれども、無明を以て熏習するがゆへ、則ち染相あり、無明は本來流轉の業用のみなれども、眞如を以て熏習するがゆへ、清淨の業用を生ずるに至る。

詳義 上來既に染淨二熏の起點たる要素に四法あることを説明せり、依て今此の四法を圖示すれば左の如し。

- 一、眞如……………淨法……………覺
  - 二、無明……………染因……………
  - 三、業識……………妄心……………
  - 四、六塵……………妄境界……………
- ……………染法……………不覺

又染淨二熏に於て、染法熏習は無明を以て起點とし、無明の力強くして眞如に染熏を與へ、向下的流轉の形式を取り、迷界の現象を顯現するに至るもの、又淨法熏習は眞如を以て起點とし、眞如の力強くして無明に淨熏を與へ、向上的還滅の形式を取り、悟界の現象を顯現するに至るものなり、即ち左の如し。

熏習の義に就て性相二宗の相違を問ふ

染法熏習……………(無明↓眞如)……………向下的流轉……………迷界の顯現  
淨法熏習……………(眞如↓無明)……………向上的還滅……………悟界の顯現

又熏習の義に就て性相二宗の異點を述べれば、性宗起信論に於ては眞如緣起論を主張し眞如熏習の義を説く、然るに相宗唯識論に於ては賴耶緣起論を主張し、眞如凝然不作諸法と立て、眞如熏習の義を許さず、即ち唯識論に於ては、能熏の四義(有生滅、有勝用、有増減、和合性)を立て、眞如は勿論第八識も能熏の義なく、七轉識及相應の心所のみ能熏の義ありとし、又所熏の四義(堅住性、無記性、可熏性、和合性)を立て、第八識のみ所熏の法なりと爲す、依て今更に此の能熏と所熏に就て、委しく其異點を摘示すれば左の如し。

先づ能熏に就て、第一唯識論は有生滅の義を立て、不生滅無爲法たる眞如には能熏の義なしと云ふ、然るに起信論は有爲無爲に通じて能熏の義を許し、不生滅無爲の眞如に能熏ありとす、第二唯識論は有勝用の義を立て、第八識の如く無覆無記性にして善惡二性の勝用なきものは能熏の力なく、能熏の力用あるものは前七轉識なりと云ふ、然るに起信論は八識皆共に能熏の義を許す、第三唯識論は有増減の義を立て、能熏を因位に局りて果位に通せず、果位は佛々平等にして圓滿具足し増減あることなければ、熏習の義な



しと云ふ、然るに起信論は因位果位に通じて能熏の義を立つ、次に所熏に就て、第一唯識論は堅住性の義を立て、前七轉識の如き間斷あるものは所熏の義なしと云ふ、然るに起信論は之を許す、第二唯識論は無記性の義を立て、善染法は所熏の義なしと云ふ、然るに起信論は之を許す第三唯識論は可熏性の義を立て、自性堅實の真如は所熏の義なしと云ふ、然るに起信論は真如隨縁の義を立て、所熏の義を許す、第四唯識論は所熏の義を有爲に限り有體に限るも、起信起は無爲に通じ無體の無明に通ずと爲す。

### 一七 染法熏習

云何熏習起染法不斷。所謂以依真如法故有於無明。以有無明染法因故即熏習真如。以熏習故則有妄心。以有妄心即熏習無明。不了真如法故不覺念起現妄境界。以有妄境界染法緣故即熏習妄心。令其念著造種種業受於一切身心等苦。

和譯 云何が熏習して染法を起して斷ぜざる、謂ゆる真如の法に依るを以ての故に無明あり、無明染法の因あるを以ての故に即ち真如に熏習す、熏習を以ての故に則ち妄心あり、妄心あるを以て即ち無明に熏習して、真如の法を

染法熏習の略説

了せざるが故に不覺の念起りて妄境を現す、妄境界染法の縁あるを以ての故に即ち妄心に熏習し、其をして念著して種々の業を造りて、一切の身心等の苦を受けしむ。

要義 染法熏習を述ぶる中、先づ之を略説す。

染法熏習は染法を能熏とし淨法を所熏とし、以て染法流轉の諸現象を惹起相續して絶へざることを説く、即ち先づ無明熏習行はる、無明の存在如何と云ふに、真如の法に依るを以て、此に一切染法の第一原因たる無明存在す、既に無明あるを以て此の無明直ちに真如に熏習す、清淨の真如は無明の熏習を受けて起動し、即ち業識の妄心となる、妄心起れば此に妄心熏習行はる、則ち妄心あれば還て直ちに無明に熏習す、此に於て無明益々増長し、真如の法を了知せざるに至り、轉識現識等一層闢き不覺無明の念起り、終に妄境界を現するに至る、妄境界現すれば此に妄境界熏習行はる、則ち此の妄境界は染法の縁となり、外より更に業識の妄心に熏習し、此に於て妄心益々増長し、智相相續相の法執の妄念と執取相計名相の我執の取著とを起し、此の惑に依て起業相の種々の業を造り、業に依て業繫苦相の心身の苦報を生ずるなり。





此妄境界熏習義則有二種。云何爲一。一者增長念熏習。二者增長取熏習。妄心熏習義有二種。云何爲一。一者業識根本熏習能受阿羅漢辟支佛一切菩薩生滅苦故。一者增長分別事識熏習能受凡夫業繫苦故。無明熏習義有二種。云何爲一。一者根本熏習以能成就業識義故。二者所起見愛熏習以能成就分別事識義故。

**和譯** 此の妄境界熏習の義に則ち二種あり、如何が二を爲す、一には增長念熏習、二には增長取熏習なり、妄心熏習の義に二種あり、如何が二を爲す、一には業識根本熏習、能く阿羅漢辟支佛一切の菩薩に生滅の苦を受けしむる故に、二には增長分別事識熏習、能く凡夫に業繫の苦を受けしむる故に、無明熏習の義に二種あり、如何が二を爲す一には根本熏習、能く業識を成就する義を以ての故に、二には所起の見愛熏習、能く分別事識を成就する義を以ての故に。

**要義** 前に染法熏習を略説し、今之を廣説す、即ち妄境界と妄心と無明の三熏習に、各々二種を分ちて熏習の相を詳にす。

染熏習を略説するに就ては、無明妄心安境界の順轉に約して説明せしが、今は逆轉に約して陳ぶ、即ち最後の妄境界熏習に二種あり、一に增長念熏習とは境界の力に依て法執の念を増長せしむるもの、二に增長取熏習とは境界の力に依て我執の取著を増長せしむるもの、

染法熏習の廣説

妄境界熏習の二種

妄心熏習の二種

無明熏習の二種

るもの、次の妄心熏習に二種あり、一に業識根本熏習とは業識の妄心が根本無明に熏習し、二乗の聖者をして變易の細苦を受けしむるもの、即ち阿羅漢(聲聞)、辟支佛(緣覺)一切菩薩をして、既に分段生死を脱せしむるも、未だ變易生死を受けしむ、二に增長分別事識熏習とは能なる妄心が枝末無明に熏習し、能く凡夫に分段生死の苦を受けしむるもの、初の無明熏習に二種あり、一に根本熏習とは根本無明が真如に熏習して、業轉現の三細阿黎耶識を成ずるもの、今は初の一を擧げて單に業識と云ふ二に所起見愛熏習とは枝末無明の見愛が黎耶の心體に熏習して、分別事識即ち第六意識を成ずるもの是れなり。

### 一八 淨法熏習

云何熏習起淨法不斷。所謂以有眞如法故能熏習無明。以熏習因緣力故則令妄心厭生死苦樂求涅槃。以此妄心有厭求因緣故即熏習眞如。自信已性知心妄動無前境界修遠離法。以如實知無前境界故。種々方便起隨順行不取不念。乃至久遠熏習力故。無明則滅。以無明滅故心



無有起。以無起故境界隨滅。以因緣俱滅故。心相皆盡名得涅槃。成自然業。

和譯 云何が熏習し淨法を起して斷ぜざる、謂ゆる眞如の法あるを以ての故に能く無明に熏習す、熏習の因縁力を以ての故に則ち妄心をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、此の妄心に厭求の因縁あるを以ての故に即ち眞如に熏習す。

自ら已性を信じ心妄に動じて前境界なしと知り遠離の法を修す、實の如く前境界なしと知るを以ての故に、種々に方便して隨順行を起し取せず念せず、乃至久遠の熏習力の故に。

無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に心起ることあることなし、起ることなきを以ての故に境界隨て滅す、因縁俱に滅するを以ての故に、心相皆盡くるを涅槃を得て自然の業を成すと名く。

淨法熏習の略説

要義 淨法熏習を述ぶる中、先づ之を略説す。

淨法熏習は淨法を能熏とし染法を所熏とし、以て淨法還滅の諸現象を惹起相續して絶へざることを説く、即ち先づ眞如熏習行はる、眞如法は本覺として煩惱妄念中に存在するを以て、能く無明に熏習す、眞如が無明に熏習する因縁力を以て、則ち煩惱妄念の心中に、生死の苦を厭ひ涅槃を樂求するに至る、之を『義記』に本熏と云ふ、此の妄心に厭求の因縁起れば、此に妄心熏習行はる、則ち此の厭求の心直ちに眞如に反熏するに至る、之を『義記』に新熏と云ふ。

斯くして自ら自己の本性たるや、唯心無境にして、如來藏無量の功德を有することを知り(十信)、眞心が無明の爲めに妄動して、業轉現の三細となり、心外に別に境界なしと知り(十住)、之を遠離する方法として唯識觀等を修し(十行)、更に進みて、實の如く心外の實境なると知り(初地)、種々に方便して眞如隨順行を起す、その行たるや、眞如無相の行なれば、所取なく能念なく全く無念無相なり(二地以上)、斯くて地前に一大阿僧祇劫、地上に二大阿僧祇劫と云ふ久遠劫の熏習力を爲す。

是を以て根本無明則ち滅す、根本無明滅するを以て、業轉現の妄心起ることなし、此の妄心起ることなきを以て、妄境隨て滅し心外の實境と認むるものあることなし、斯く迷の因たる無明も、緣たる境界相も俱に滅するを以て、此に迷の心相皆盡くるなり、之れ即ち佛陀涅槃の妙果なれば、自然の業用として、報化二身を顯現し、衆生を攝化するに至る。



妄心熏習義有二種。云何爲一。一者分別事識熏習依諸凡夫二乘人等厭



生死苦隨力所能以趣向無上道故。二者意熏習謂諸菩薩發心勇猛速趣涅槃故。眞如熏習義有二種。云何爲一。一者自體相熏習。二者用熏習。

和譯 安心熏習の義に二種あり、云何が二を爲す、一には分別事識熏習、諸の凡夫二乘の人等生死の苦を厭ふに依て、力の所能に隨て無上道に趣向するを以ての故に、二には意熏習、謂く諸の菩薩發心勇猛にして速に涅槃に趣くが故に、眞如熏習の義に二種あり、云何が二を爲す、一には自體相熏習、二には用熏習なり。

淨法熏習の廣説

要義 前に淨法熏習を略説し、今之を廣説す、即ち安心熏習と眞如熏習の二種に分ち更に各々二種に分ちて熏習の相を詳にす。

安心熏習の二種

染法熏習の廣説と同じく今淨法熏習も亦廣説に於ては逆に安心熏習より説く、然して前の染熏に安心熏習の名あるも、前は流轉門にして今は還滅門なれば、其義異なりと知るべし、還滅門中に安心熏習の名ある所以は、假令向上策修なりと雖も、因位修行の間は盡く皆不覺安心中の所作なればなり、先づ安心熏習に二種あり、一に分別事識熏習とは意識熏習にて十信の凡夫并に二乘等の唯心の理を知らず、生死の外に涅槃あり、涅槃の外に生死ありと思ひ、以て生死は厭ふべく涅槃は欣ふべしとなし、自己の力に隨ふて、漸々に無上菩提の道に趣向するものを云ふ、二に意熏習とは本に就けば業識にて通じて云へば五意なり、此は三賢十地の菩薩の爲す所にして、前の事識の心外に實境を認むる

眞如熏習の二種

ものと異り、一切諸法唯識の理を知り、黎耶の本識を了し、殆ど能所未分の絶對的に達するを以て、其の發心も修行も勇猛にして、速疾に涅槃に趣くものを云ふ、次に眞如熏習に二種あり、一に自體相熏習とは眞如内熏にして、自己の本性たる眞如の體大相大が内より熏發するを云ひ、二に用熏習とは眞如外熏にして、眞如の用大より報化二身を現じて教化するを云ふ。

自體相熏習者。從無始世來具無漏法。備有不思議業。作境界之性。依此二義。恒常熏習。以有熏習力。故能令衆生厭生死苦。樂求涅槃。自信已身有眞如法。發心修行。

和譯 自體相熏習とは、無始世より來た、無漏の法を具して、備に不思議の業あり、境界の性と作る、此の二義に依て恒に常に熏習す、熏習力あるを以ての故に、能く衆生をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求し、自ら已身に眞如の法ありと信じ、發心修行せしむ。

要義 眞如熏習に自體相熏習と用熏習の二ある中、今は初の自體相熏習即ち眞如内熏を陳ぶ。

自體相熏習とは吾人凡夫と雖も、無始已來先天的に無漏清淨の本覺を具有して、不思議冥熏の業用と境界の性とを備ふ、此に不思議冥熏の業用とは、此の無漏本覺の法が衆生の

自體相熏習の要旨



妄心に熏じて厭求心を起さしめ、以て能觀の智を成するを云ひ、境界の性とは無漏本覺の法は冥熏の作用あるのみならず、能觀の智の爲めに却て又所觀の境界と成るを云ふ、始本相對すれば前者は始覺にして後者は本覺なり、又心境相對すれば前者は心にして後者は境なり、又體相を以てすれば前者は相にして後者は體なり、實に此の心境即ち體相の二義を以て、恒常に妄心に熏習す、熏習するがゆへ、能く衆生をして厭離樂求の心を發起し、生死流轉の已身に眞如の大寶あるを信じ、修行せしむるに至る、之れ即ち眞如内熏の作用なり。

問曰若如是義者一切衆生悉有眞如等皆熏習云何有信無信無量前後差別皆應一時自知有眞如法勤修方便等入涅槃。

答曰眞如本一而有無量無邊無明從本已來自性差別厚薄不同故。過恒河沙等上煩惱依無明起差別。我見愛染煩惱依無明起差別。如是一切煩惱依於無明所起前後無量差別。唯如來能知故。

又諸佛法有因有緣因緣具足乃得成辨。如木中火性是火正因為無人知不假方便能自燒木無有是處。衆生亦爾雖有正因熏習之力若不遇諸

佛菩薩善知識等以之爲緣能自斷煩惱入涅槃者則無是處。若雖有外緣之力而內淨法未有熏習力者亦不能究竟厭生死苦樂求涅槃。若因緣具足者所謂自有熏習之力又爲諸佛菩薩等慈悲願護故能起厭苦心。信有涅槃修習善根以修善根成熟故則值諸佛菩薩示教利喜乃能進趣向涅槃道。

和譯

問て曰く若し是の如くの義ならば、一切衆生悉く眞如ありて等く皆熏習せん、云何ぞ有信無信無量前後の差別する、皆應に一時に自ら眞如の法ありき知て、勤修方便して等く涅槃に入るべし。

答て曰く眞如一本一なり、而有無量無邊の無明ありて、本より已來自性差別厚薄同じからざるが故に、過恒河沙等の上煩惱の無明に依て起る差別あり、我見愛染煩惱の無明に依て起る差別あり、是の如くの一切煩惱の無明に依て起る所の前後無量の差別あり、唯だ如來のみ能く知るが故に。

又諸佛の法には因あり縁あり、因縁具足して乃ち成辨することを得、水中の火性は是れ火の正因、若し人の知ることもなく方便を假らずして能く自ら木を燒くこと、是の處り有ることなきが如し、衆生も亦爾り、正因熏習の力ありき雖も、若し諸佛菩薩善知識等に遇て、之を以て縁と爲さずして、能く自ら煩惱を斷じ涅槃に入ることも、則ち是の處りなし、若し外縁の力ありき雖も、内の淨法未だ熏習の力あらざる者は、亦究竟して生死の苦を厭ひ涅槃を樂求すること能はず、若し因縁具足する者は、謂ゆる自ら熏習の力あり、又諸佛菩薩等の爲めに慈悲願護せらるゝが故に、能く厭



善の心を起し、涅槃あることを信じ、善根を修習す、善根を修すること成熟するを以ての故に、則ち諸佛菩薩の示教に値ひ、利喜して乃ち能く進趣し涅槃の道に向ふ。

**要義** 自體相熏習に關する疑問を、問答を設けて通釋す。

問て曰く若し是の如く眞如内熏ありとせば、一切衆生悉く眞如を具有し、然も其の眞如は平等無差別なるがゆへ、皆等しく熏習すべき理なり、然るに云何ぞ現在に就て見るも信あるものあり、信なきものあり、又未來信心を發起するに就て見るも前後不同なり、斯く無量に差別するもの何故なるか、皆應に一時に自ら眞如の法ありと知て、勤修方便して皆等しく如來涅槃の境界に入るべき理なりと。

第一答の要旨

其の答に二義を説く、第一義の意は眞如内熏は同一なりと雖も、無明煩惱は人々厚薄不同あるが致す所なりと云ひ、第二義の意は内因の眞如熏習力と外縁の佛菩薩誘導力と内外因縁和合せざるべからず、此の内外因縁和合千差萬別なるが致す所なりと云ふにあり。  
第一義、眞如は本來同一平等にして、人に依りて差別するものに非ず、然れども無量無邊の根本無明ありて、本來先天的に自性差別し厚薄不同なり、隨て根本無明より起る過恒河沙等の、上煩惱(所知障のこと)も、我見見愛染愛染修の煩惱(煩惱障のこと)も、種々差別するがゆへ、信心を發起するに就て前後無量の差別存するや明なり、斯く感性差別し

衆生等しく眞如内熏ありとせば皆等しく成佛すべき理なり然るに之に反するもの如何

第二答の要旨

無量前後すること、吾等凡夫の知る所に非ず、唯だ佛陀如來のみ能く知り給ふ、(根本無明に厚薄ありや否やの問題に就ては、古來異論あるがゆへ、第十一章餘論に至りて、委しく説明すべし)。

第二義、又佛教の通則として因縁和合の義を説く、即ち内因外縁具足して一切成辨するものとす、譬へば木の燃ゆるは木中に存す火性の爲めなり、此の火性こそ全く火の正因なりと雖も、若し人ありて之に點火する外縁の方便を興へざらんか、焉ぞ能く自ら木の燃焼する處こゝりなかるべし、今衆生も亦然り、内に無明を打破する眞如正因の熏習力ありとも、外に諸佛菩薩善知識に遇ふ縁なくば、能く自ら煩惱を斷じて涅槃に入るの理なかるべく、之に反して、外縁の力ありとも、内熏淨法の力なくば、究竟徹底して生死の苦を厭ひ涅槃を樂ひ求むること能はざるべし、然るに若し夫れ内因外縁和合具足して、内には眞如熏習の力あり、外には諸佛菩薩等の爲め慈悲の願力を以て護持せられんか、能く厭苦の心を起し、涅槃あるを信じ、善根を修習す、善根成熟の力を以て、則ち諸佛菩薩の示指教授に値ひ奉り利益歡喜を得、益々進趣して涅槃の大道に入ることを得るなり、されば衆生に信不信あり、又信心發起に前後無量の差別あること、毫も疑を存すべき餘地なし。



用熏習者即是衆生外緣之力如是外緣有無量義略說二種云何爲一者差別緣二者平等緣

和譯 用熏習とは即ち是れ衆生の外縁の力なり是の如きの外縁に無量の義あり、略して説くに二種あり、云何が二を爲す、一には差別縁、二には平等縁なり。

用熏習の要旨

要義 眞如熏習に二種ある中、既に自體相熏習を明せしゆへ、次に用熏習の義を陳ぶ。次に用熏習とは眞如の用大より報化二身を現じ、外縁となりて衆生を教化するものを云ふ、是の如き外熏に無量の義あれども、略して説くに二種あり、一に差別縁二に平等縁是れなり、差別縁とは衆生の機類に應じて種々の相を現するを云ひ、平等縁とは唯だ佛身のみを現じて教化するを云ふ。

差別縁者此人依於諸佛菩薩等從初發意始求道時乃至得佛於中若見若念或爲眷屬父母諸親或爲給使或爲知友或爲冤家或起四攝乃至一切所作無量行緣以起大悲熏習之力能令衆生增長善根若見若聞得利益故此緣有二種云何爲一者近縁速得度故二者遠縁久遠得度故是近遠二縁分別復有二種云何爲一者增長行縁二者受道縁

和譯

差別縁とは此の人は諸佛菩薩等に依て、初發意に始めて道を求むる時より、乃至佛を得るまで、中に於て若くは見若くは念す、或は眷屬父母諸親を爲り或は給使を爲り或は知友を爲り或は冤家を爲り或は四攝を起す、乃至一切の所作無量の行縁あり、大悲を起し熏習の力を以て、能く衆生をして善根を增長し、若くは見若くは聞き利益を得せしむる故に、此の縁に二種あり、云何が二を爲す、一には近縁速に度するを得るが故に、二には遠縁久遠に度するを得る故に、是が近遠の二縁分別するに復た二種あり、云何が二を爲す、一には增長行縁、二には受道縁なり。

差別縁とは如何

要義 先づ差別縁を陳ぶ。

差別縁とは菩薩佛陀が、一切衆生各自の地位境遇に應じて身形を見せしめ、若くは功德を念せしむるものなり、然らば菩薩佛陀が衆生教化の相狀如何と云ふに、或は眷屬父母諸親を爲りて慈愛を施し、或は卑き給使となりて助け、或は知友を爲りて勧め導き、或は冤家を爲りて恐怖せしめ、或は菩薩が衆生教化の方法たる布施愛語利行同事と云ふ四攝法を起し、乃至一切の所作を示し、無量の行縁あるなり、斯く深重大悲を起し外縁となりて熏習するがゆへ、能く衆生をして善根を增長し、見聞し利益を得せしむ、此の差別縁に二種あり、一に近縁とは根機の熟するものは速に化度するを得るを云ひ、二に遠縁とは未だ根機の熟せざるものは久遠に化度するを得るを云ふ、此の近遠二縁の何れにも亦二種を分つ、即ち一に增長行縁とは眞如無漏智を起すまでの方便行にして、二に



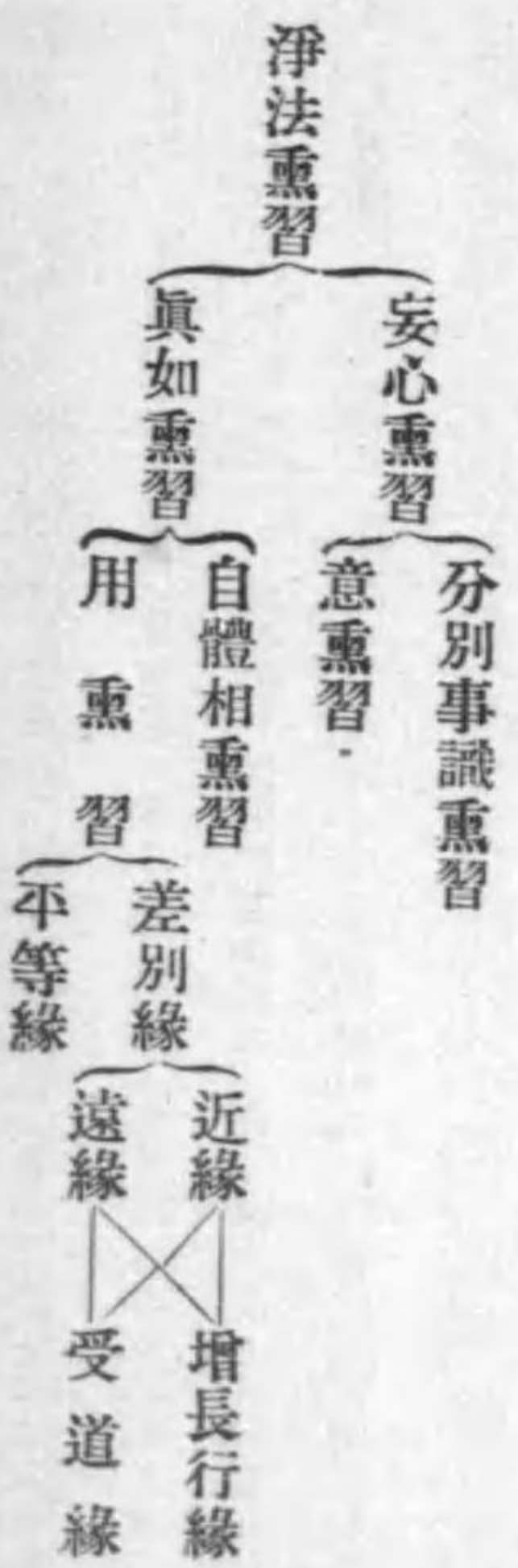
受道縁とは眞如無漏智を起す正觀なり。

平等縁者一切諸佛菩薩皆願度脱一切衆生自然熏習常恒不捨以同體智力故隨應見聞而現作業所謂衆生依於三昧乃得平等見諸佛故

和譯 平等縁とは一切の諸佛菩薩、皆一切衆生を度脱せんことを願ひ、自然に熏習して常恒に捨てず、同體の智力を以ての故に、見聞すべきに隨て作業を現す、謂ゆる衆生は三昧に依り、乃ち平等に諸佛を見ることを得るが故なり。

要義 次に平等縁を陳ぶ。

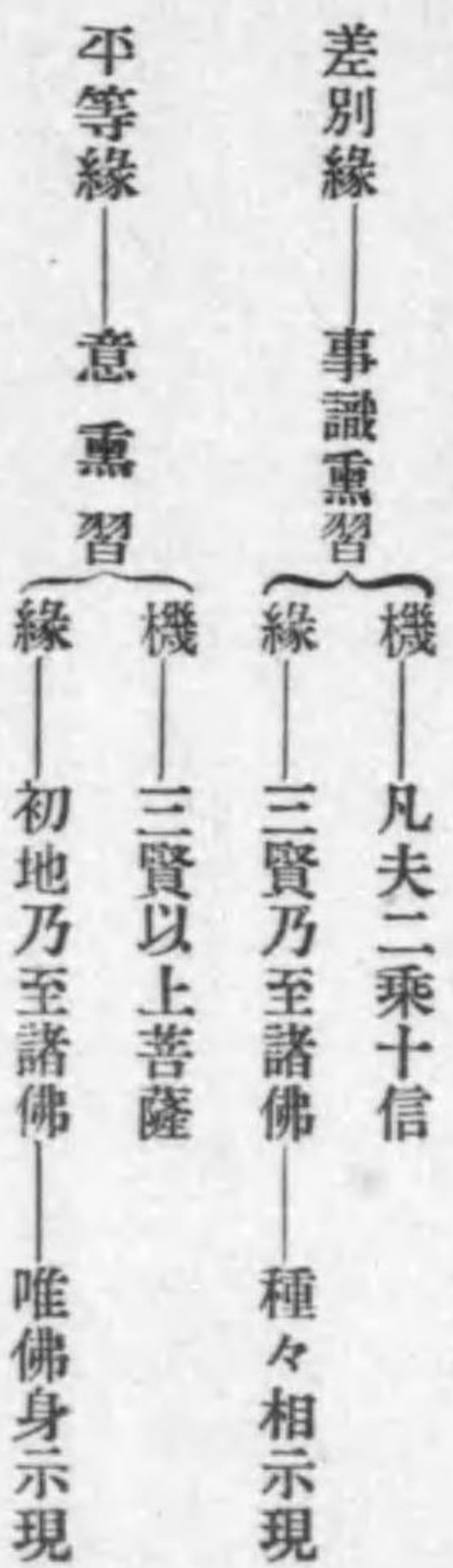
平等縁とは諸佛菩薩が偉大なる力を以て、一切衆生を平等に度脱せんとするものを云ふ即ち無縁の慈悲より自然に一切衆生に熏習を與へ、常に攝取して捨てず、同體の智力とて凡聖染淨同一體なりと知れる力用を有するがゆへ、衆生の見聞すべきに隨ひ、その心中に不思議の作業妙益を施す、然して衆生は眞如平等の三昧に依て、諸佛の身相徳量の差別を滅亡し、諸佛の身量平等にして、彼此分齊の相なきを見るなり。



平等縁とは如何

詳義

差別縁平等縁に就て、『義記』に差別縁を事識熏習に配し平等縁を意熏習に配せり、而して差別縁を受くる機并に平等縁を受くる機に就て説明する所ありと雖も、多少難澁の點あるを以て、末註の上に種々解釋を試み、殊に『教理鈔』に委しく問答分別し、『要決』も亦註解を試みたり、其の文に曰く、「此の二縁所被の機若し大判するときは、則ち差別縁は二乗及び十信と三賢の菩薩之を感じ、平等縁は登地已上の菩薩之を感じ、若し細判するときは、則ち差別縁地上に通じ、平等縁亦地前に通ず」と云へり、要決が細判に於て、二縁共に地前地上に通ずとするは可なれども、大判に於ける説明は義記に合致せざるものあり、依て今義記の説を前後照應して料簡するときは、差別縁の機は凡夫二乗十信にして、平等縁の機は三賢以上の菩薩なりと云ふべし、而して外縁たるべき化主に就ては、差別縁は三賢乃至諸佛、平等縁は初地乃至諸佛なりとす、左の如し。



此體用熏習分別復有二種云何爲一者未相應謂凡夫二乘初發意菩薩



等。以意識熏習依信力故而能修行。未得無分別心與體相應故。未得自在業修行與用相應故。二者已相應謂法身菩薩得無分別心與諸佛自體相應得自在業與諸佛智用相應。唯依法力自然修行熏習真如滅無明故。

和譯

此の體用熏習を分別するに、復た二種あり、云何が二を爲す、一には未相應謂く凡夫二乘初發意の菩薩等意と意識との熏習を以て、信力に依るが故に、而も能く修行す、未だ無分別心が體と相應することを得ざるが故に、未だ自在業の修行と用と相應することを得ざるが故に、二には已相應謂く法身の菩薩は、無分別心を得て諸佛の自體と相應し、自在の業を得て諸佛の智用と相應す、唯だ法力に依て、自然に修行して真如に熏習し無明を滅するが故に。

要義

上に説ける自體相熏習と用熏習とを、更に所化の人に就て合説し、之を未相應と已相應とに分つ、未相應とは地前、已相應とは地上是れなり。

未相應とは如何

已相應とは如何

未相應とは凡夫(煩惱障を)二乘(所知障を)初發意の菩薩(二乘に)等は未だ無明を斷せざるを以て、真如一法界の理を悟らすと雖も、五意と六識との熏習を受け、又真如を説の如く信する力を以て、能く修行することを得るなり、其の未相應と名くる所以如何と云ふに、此の位のものには有分別智なれば、未だ無分別心と真如法身の體と相應せざるが故なり、隨てまた後得智たる自在業と報化二身の用とも相應せざるが故なり、已相應とは初地以

上の法身の菩薩は已に一分づゝ無明を斷するを以て、無分別心を得て真如法身の體と相應し、隨てまた後得智たる自在業と報化二身の智用とも相應す、之れ已相應と名けらるゝ所以なり、實に此位の菩薩は真如法の力に依て修行し、殊に入地以上は任運無功用自然に真如に熏習し無明を滅すること、宛も流を下る船の棹を勞せざるが如し。

復次染法從無始已來熏習不斷乃至得佛後則有斷淨法熏習則無有斷盡於未來此義云何以真如法常熏習故。妄心則滅法身顯現起用熏習故無有斷。

和譯

復た次に染法は無始より已來た、熏習して斷せず、乃至佛を得る後、則ち斷することあり、淨法熏習は則ち斷することあることなし、未來を盡す、此の義云何、真如の法常に熏習するを以ての故に、妄心則ち滅すれば、法身顯現して、用熏習を起すが故に、斷することあることなし。

要義

上來既に染法熏習と淨法熏習とを明し終るを以て、今此に染淨二熏の盡くることありや否やを陳ぶ、即ち染淨二熏の終局論なり。

染法熏習は無始已來熏習して斷へざるも、漸次策勵修養し、終に成佛すれば滅盡するものなり、即ち無始有終なりと云ふべし、淨法熏習は盡未來際盡くることなし、何となれば真如の法は本來穩然として存在し、常に熏習して絶ゆることなし、故に妄心則ち滅す

染淨二熏の盡不盡を問ふ



れば、眞如法身顯現して、愈々衆生外縁の用熏習を起し、毫も絶ゆることあることなし即ち無始無終なりと云ふべし。

### 一九 體相用の三大

生滅門を釋する中、既に法を説き終りたるを以て、今更に體相用三大の義を説く、之れ立義分に於て、法と義を分つ中、上來の説明は法に當り、今の説明は義に當る。又生滅門中に於ける上來の説明は、立義分に於て法を眞如と生滅に開き、其の生滅を釋して「是心生滅因縁相」と云ふ七字に當り、今の説明は「能示摩訶衍自體相用故」の十字に當る、而して體相用の三大を眞如門中に説かず、斯く獨り生滅門中に説く所以のもの眞如門は絶對的説明なるを以て單に體を出し、生滅門は相對的説明なるを以て委しく體相用三大を出すものと知るべし。

復次眞如自體相者一切凡夫聲聞緣覺菩薩諸佛無有増減非前際生非後際滅畢竟常恒

和譯 復た次に眞如の自の體相とは、一切の凡夫と聲聞と緣覺と菩薩と諸佛とに、増減あることなし、前際に生ずるに非ず後際に滅するに非ず、畢竟して常恒なり。

體大の說明

要義 體相用三大を説明するに、初めに體相二大次に用大を説く、今は初めの體相二大の中、體大を陳ぶ。

復た次に眞如の體相二大を説明せんに、體大とは一切の凡夫と聲聞と緣覺と菩薩と諸佛とに通じて平等無差別なり、されば空間上より云ふも、悟れる佛とて増すことなく、迷へる衆生とて減することなし、又時間上より云ふも、前際の過去に生ぜしものに非ず後際の未來に滅するものに非ず、畢竟するに常恒不變なり。

從本以來自性滿足一切功德所謂自體有大智慧光明義故。徧照法界義故。眞實識知義故。自性清淨心義故。常樂我淨義故。清涼不變自在義故。具足如是過於恒沙不離不斷不異不思議佛法。乃至滿足無有所少義故名爲如來藏亦名如來法身。

和譯 本より已來自性に一切の功德を滿足す、謂ゆる自體に大智慧光明の義有るが故に、徧照法界の義あるが故に、眞實識知の義あるが故に、自性清淨心の義あるが故に、常樂我淨の義あるが故に、清涼不變自在の義あるが故に、是くの如く恒沙に過ぎたる不離不斷不異不思議の佛法を具足し、乃至満足して少ること無き義あるが故に名けて如來藏と爲す、亦は如來の法身と名く。

要義 次に相大を説くに、先づ眞如の徳相を陳ぶ。



相大とは真如の自性には本來無限の功德を圓滿具足せり、何となれば真如の自體には、  
 (一)無明の迷闇を破する大智慧光明の義あり、(二)其の光明徧く法界を照すの義あり、(三)眞  
 實に諸法を識知するの義あり、(四)惑染を離れて自性清淨心の義あり、(五)常三世に改まらざる樂苦なき  
我自在の淨煩惱の四徳圓備の義あり、清涼惑の熱惱不變報の生自在業の繫縛の義あり、是  
 の如く恒河沙に過ぎたる無量の功德ありて、真如の體を離れず、無始より相續して斷じ  
 ず、此の功德たるや真如と同體一味にして異ならず、之れ實に不可思議なる佛陀所證の  
 功德法なり、斯く無量無邊一切の功德を具足して、缺くる所なきゆへ、因位にありては  
 如來藏と名け、果位にありては如來法身と名く。

問曰上説眞如其體平等離一切相云何復説體有如是種種功德。

答曰雖實有此諸功德義而無差別之相等同一味唯一眞如此義云何以無分別離分別相是故無二。

和譯 問ふて曰く上に眞如の其體は平等にして一切の相を離るを説く、云何ぞ復た體に是くの如き種々の功德ありと説くや。

答へて曰く實に此の諸の功德の義ありと雖も而も差別の相無し、等同一味にして唯だ一眞如なり此義云何無分別にて分別の相を離るゝを以て是故に無二と云ふ。

無差別の眞如に差別の徳相ある所以

要義 眞如に無量の功德ありとせば、眞如離相の主張に違ふ、依て問答を設け消釋す。

問ふ、上の離言眞如の所に於ては、眞如は其の體絕對平等にして一切差別の相を離ると云ふ、然るに云何ぞ今此に至りて、眞如の體に大智慧光明等無量差別の功德ありと説くや、答ふ、眞如には實に大智慧光明等の無量差別の功德ありと雖も、然も差別の相なし差別と同時に無差別なり、全く等同一味にして唯一絕對の眞如なるのみ、斯く差別のまゝ無差別と云はるゝ義理云何と云ふに、眞如は元來無分別にして、吾等凡夫が妄想分別の相を離れたるものなればなり、是の故に差別即無差別、有相即無相、現象即實在にて無二なり。

復以何義得説差別。以依業識生滅相示。此云何示以一切法本來唯心實無於念而有安心。不覺起念見諸境界故説無明。心性不起即是大智慧光明義故。若心起見則有不見之相。心性離見即是徧照法界義故。若心有動非眞識知。無有自性非常非樂非我非淨熱惱衰變則不自在。乃至具有過恒沙等妄染之義。對此義故。心性無動則有過恒沙等諸淨功德相。義示現。若心有起更見前法可念者。則有所少。如是淨法無量功德即是。



一心更無所念。是故滿足名爲法身如來之藏。

和譯

復た何の義を以て差別を説くことを得るや、業識生滅の相に依て示すを以てなり、此れ云何が示すや、一切の法は本來唯心にして實に念無けれども、而も妄心有り覺ゆす念を起し諸の境界を見るを以ての故に無明と説く、心性の不起なるは即ち是れ大智慧光明の義なるが故に、若し心に見を起せば則ち不見の相あり、心性の見を離るゝは即ち是れ徧照法界の義なるが故に、若し心に動あるは眞の識知に非ず、自性あること無し、常に非ず、樂に非ず、我に故す、淨に非ず、熱惱衰變して則ち自在ならず、乃至具さに過恒沙等の妄染の義あり、此義に對するが故に心性に動無ければ則ち過恒沙等の諸の淨功德相の義示現すること有り、若し心起ること有りて更に前法の念す可きを見る者は則ち少る所あり、是くの如きの淨法無量の功德は即ち是れ一心にして更に念する所無し、是の故に滿足するを名けて法身如來の藏と爲す。

要義 前に差別にして然も不二なりと陳ぶ、故に今は不二にして然も差別なる義を説く。

上來説きし如く全く無差別なりとせば、復た何の義を以て無差別のものを差別なりと説くや、曰く眞如起動して業識の生滅心となり、此に種々の相を惹起するに至る、斯く忘心の上に顯現したる差別相に反顯して、眞如にも亦恒沙の功德差別相あることを表示するものなり、然らば如何様に妄染に對して眞如功德相を反顯するかと云ふに、抑々一切萬法の本體は本來唯心即ち絶對平等にして差別の妄心あることなし、然るに絶對を絶

如何にして  
徳相を  
表示する  
や

對なりと知るの明なく、眞如を眞如と知るの明なく、絶對眞如に對して差別の妄念を起し、心外に諸の境界を見るを以て、此に無明と説く、此の無明の迷闇に反顯するを以て心性に無明の起らざる時は即ち是を大智慧光明の義なることを知る(一)若し妄心に見を起せば同時に能所主客ありて、一方に見ざるの相あり、之に反顯するを以て、心性の妄見を離るゝは即ち是れ徧照法界の義なることを知る(二)若し心性が妄念の爲めに起動せば、眞の識知に非ず、之に反顯するを以て、眞實識知の義あり(三)自性もなく、常樂我淨の四徳もなく、熱惱衰して自在ならず、乃至具さに過恒沙等の妄染に對して、心性に動なければ、即ち是れ自性清淨なり、常樂我淨なりと、過恒沙等の諸の清淨功德の相を示現するなり(四)若し妄心起動して心外に一物にても認むるものあらんか、則ち缺くる所あるなり、是の如き清淨眞如法に於ける無量の功德は、本來一心に具有すれば更に之を心外に求むべきに非ざるなり、斯く功德圓滿具足するを以て、之を法身如來の藏と云ふなり。

復次眞如用者。所謂諸佛如來。本在因地發大慈悲。修諸波羅蜜攝化衆生。立大誓願。盡欲度脫等衆生界。亦不限劫數。盡於未來。以取一切衆生如已身故。而亦不取衆生相。此以何義謂如實知一切衆生。及與已



身眞如平等無別異故。以有如是大方便智。除滅無明見本法身。自然而有不思議業種種之用。即與眞如等徧一切處。又亦無有用相可得。何以故。謂諸佛如來唯是法身智相之身。第一義諦無有世諦境界。離於施作。但隨衆生見聞得益故說爲用。

和譯

復た次に眞如の用とは謂ゆる諸佛如來は、本と因地に在せしとき、大慈悲を發し諸の波羅蜜を修して衆生を攝化するに大誓願を立て、盡く等しく衆生界を度脱せんを欲し亦劫數を限らず未來を盡す、一切衆生を取るに己身の如くするを以ての故に、而も亦衆生の相を取らず、此れ何の義なるを以てぞ、謂く實の如く一切衆生と及び己身とは眞如平等にして別異無しと知るが故なり。

是くの如き大方便智あるを以て無明を除滅して本法身を見る、自然にして而も不思議の業種々の用ありて、即ち眞如と等しく一切處に徧す、又亦用相の得べき有ること無し、何を以ての故ぞ、謂く諸佛如來は唯是れ法身智相の身、第一義諦にして世諦の境界あること無し、施作を離る、但だ衆生の見聞に隨て益を得る故に、説いて用と爲す。

要義

用大とは眞如より顯現せし報化二身が世間出世間の善の因果を生ずる力用なりとは、既に立義分の下に於て陳ぶるが如し、今用大を示すに報化二身の化他の妙用を出し、強ち世間出世間の善の因果を生ずる力用を詳説せざるなり、先づ總じて用大を説くに佛陀の自利と利他とに就て、用大の相を陳ぶ。

用大の説

眞如の用大とは諸佛如來が因地に在せし時、大慈悲心を發し、諸の波羅蜜の行を修して衆生を攝化するに大誓願を立て、横には一切衆生を盡く等しく度脱せんを欲し、亦豎には劫數に限りを立てず未來際を盡す、而して一切衆生に對するや、實に自己一身を思念する如くにし、然も亦彼の人此の人と云ふ衆生差別の相を取らず、何故に一切衆生を己身の如く思念し然も亦衆生の相を取らざるかと云ふに、一切衆生と己身とは眞如平等にして、別異なきが致す所にして、之れ實に同體の大慈なるものなり、此の如く因位の修行より大方便智あるを以て、無明煩惱を除滅して本有の法身を證見するに至る、斯く因位の自利を成じ果位に到達すれば、同時に自然に種々不可思議の業用を起す、之れ實に利他の大用なり、而して此の業用たるや眞如の體に即する用なれば、眞如と等しく一切處に徧滿す、一切處に徧滿すとも雖此れこそ佛陀の化用なりと認識すべき用相あることなし、然らば何が故に佛に三身を具足するや、曰く佛の報化二身は衆生の機感に應じて顯現するものなれば、若し夫れ機感なからんか、佛は只之れ法身（理）智相（智）の身即ち理智不二の眞如法身なり、第一義諦の眞如の上には、第二義世諦に於ける差別の境界あることなく、全く施設造作を離る、斯く眞如法身は湛然寂靜なりと雖も、寂に即して常に照すの用あるを以て、衆生の機感に應じて見聞せしめ利益を與ふるが故に、之を説い



て用大と爲す、是れ即ち報化二身の化用なり。

此用有二種云何爲一。一者依分別事識。凡夫二乗心所見者名爲應身。以不知轉識現故。見從外來。取色分齊。不能盡知故。

二者依於業識。謂諸菩薩從初發意。乃至菩薩究竟地。心所見者。名爲報身。身有無量色。色有無量相。相有無量好。所住依果亦有無量種種莊嚴。隨所示現。即無有邊。不可窮盡。離分齊相。隨其所應。常能住持。不毀不失。如是功德。皆因諸波羅蜜等無漏行熏。及不思議熏之所成就。具足無量樂相。故說爲報身。

和譯

此用は二種あり云何が二を爲す、一には分別事識に依り、凡夫二乗の心に見る所の者を名けて應身と爲す。轉識の現するを知らざるを以ての故に外より來るを見て色の分齊を取て盡く知ること能はざるが故なり。

二には業識に依る、謂く諸の菩薩初發意より乃至菩薩究竟地の心所見の者を名けて報身と爲す、身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好あり、所住の依果も亦無量種種の莊嚴あり、示現する所に隨つて即ち邊あること無し、窮盡すべからず、分齊の相を離る、其の所應に隨つて常に能く住持して毀せず失せず、是くの如きの功德は皆諸波羅蜜等無漏の行熏及ひ不思議の成就する所に因て無量の樂相を具足するが故に説いて報身と爲す。

要義 此れより別して用大を説く中、先づ機の感見に隨て、應身と報身と分るゝことを説明す。

報應身の  
分るゝ所  
以

を説明す。

前に陳ぶる如く、諸佛が因位に於て、無限の慈悲誓願を發し、永劫の修行を成就し、法身を顯現せんか、之と同時に不思議の業用を現はす、其の業用に二種あり、一は分別事識に依て凡夫二乗の見る所のものを應身と爲す、蓋し凡夫二乗は内に六識あり、外に六境ありと執じて、唯心の理を知らず、詳言すれば、業識より轉識となり、此の轉識の上に顯はれたる現識こそ一切の境にして、應身も畢竟するに、現識の上に顯はれたる影像なるを知らず、外より來る者と見て丈六身三十二相八十隨形好の色の分齊を立て、分齊に即して無分齊應身に即して十方法界に徧滿する報身なることを、盡く知ること能はざるなり、二は業識に依て菩薩の見る所のものを報身と爲す、蓋し三賢十地の菩薩にありては、業識に依て諸法は唯心の所現と知るがゆへ佛身に分齊を認めず、即ち佛身には無量の色あり、一々の色に無量の相あり、一々の相に無量の好あり、佛陀所住の依報たる國土にも亦無量種々の莊嚴ありて、阿彌陀如來の西方極樂世界に存在しながら然も同時に廣大無邊際なりと云ふが如く、何れに佛身を示現するも然も同時に法界に徧滿して無邊なり無盡なり、全く分齊の相を離れたり、唯衆生の感見に應じて常に佛力住持して依正二報を顯現し、彼の三災等の毀ち失ふ所のものに非ざるなり、是の如きの功德たる



や、皆因位に於ける十波羅蜜の行熏即ち後天的始覺の修力と、不思議の重習即ち先天的本覺の性徳とに依て成就する所にして、無量の樂相を具足するを以て、説て報身と爲す之を要するに佛陀其者に何等區別する所なきも、機の感見に隨て、報應二身の別を現するなり。

又爲凡夫所見者。是其鹿色隨於六道。各見不同種種異類非受樂相。故説爲應身。

復次初發意菩薩等所見者以深信眞如法。故少分而見。知彼色相莊嚴等事。無來無去離分齊。唯依心現不離眞如。然此菩薩猶自分別。以未入法身位。故若得淨心。所見微妙。其用轉勝。乃至菩薩地盡見之究竟。若離業識。則無見相。以諸佛法身無有彼此色相迭相見。故。

和譯 又凡夫の所見と爲る者は是れ其の鹿色なり、六道に隨つて各々見るこそ同じからず、種々の異類は受樂の相に非ず、故に説いて應身と爲す。

復次に初發意の菩薩等の所見は、深く眞如の法を信するを以ての故に少分にして見る、彼の色相莊嚴等の事は來無く去無く分齊を離れ唯だ心に依て現じて眞如を離れずと知る、然るに此の菩薩は猶ほ自から分別して未だ法身の位に入らざるを以ての故に、若し淨心を得れば所見微妙にして其用轉勝する、乃至菩薩地盡に之を見るこそ究竟す、若し

業識を離れては則ち見相無し、諸佛の法身は彼此の色相迭ひに相見ることなきを以ての故なり。

應報二身  
共に勝劣  
ある所以

要義 重ねて應身と報身とに就て、機の感見に隨て勝劣あることを陳ぶ。

先づ應身と云はるゝ中に於ても、凡夫と二乗の見る所異れり、凡夫の見る所は鹿色劣相にして、六道に隨て各々見る所を異にす、然も此等異類の見る所は出世の相ならざるを以て受樂の相に非ず、論文に二乗の見る所を出さざるも、若し二乗の見る所を云へば出世の相にして樂相なり、斯く六道の衆生并に二乗の感見するものを説て應身と爲す、次に報身を見るに就ても、初發意等地前の見る所は、深く眞如の法を信するを以て少分見ることを得、即ち彼の依正二報の色相とか莊嚴とかの事に關しても、彼の二乗が釋尊を見るが如く、王宮に生れ雙林に滅して去來の相ありと認むるに反し、全く分齊を離れ唯だ現識上に顯はれたるものにして、實に眞如を離れずと知る、然れども地前の菩薩は未だ眞如の法を悟らざるを以て無分別に非ず、然るに若し初地淨心を得れば幾分眞如を悟るを以て、其の所見の相は微妙となり、其の用は地前より勝る、斯くして第十地に至りて之を見ること究竟す、既に妙覺位に達し業識を離れんか、轉現二識の主客なきを以て見相の見るべき相あることなし、何となれば、法身なるものは彼此分別の相あること無ければなり、假へば初發意の菩薩は朧月夜に花を見るが如く、初地の菩薩は三日月に花



を見るが如く、地盡の菩薩は十三四夜に花を見るが如く、佛は三五夜に花を賞するが如し。

問曰若諸佛法身離於色相云何能現色相

答曰即此法身是色體故能現於色所謂從本已來色心不二以色性即智故色體無形說名智身以智性即色故說名法身徧一切處所現之色無有分齊隨心能示十方世界無量菩薩無量報身無量莊嚴各各差別皆無分齊而不相妨此非心識分別能以真如自在用義故

和譯

問ふて曰く若し諸佛の法身、色相を離れば云何ぞ能く色相を現するや。

答へて曰く即ち此の法身は是れ色の體なるが故に能く色を現す、謂ゆる本より已來色心不二なり、色性即智なるを以ての故に、色體無形なるを説いて智身と名く、智性即ち色なるを以ての故に説いて法身一切處に徧すと名く、所見の色分齊あること無し、心に隨つて能く十方世界無量の菩薩無量の報身、無量の莊嚴を示す、各々の差別皆分齊無ふして而も相妨げず、此れ心識分別の能く知るに非ず、真如自在の用の義なるを以ての故なり。

要義

法身色相を離れて、而も色相を現する所以を、問答通釋す。

問ふ、若し諸佛の法身が色相を離れたりとせば、如何にして報應等の色相を現するか、答ふ、法身なるものは報應二身色相の本體なり、是を以てて能く報應二身の色相を現す

法身色相を離れ然も亦色相を現する所以

何となれば本來色心不二なり、色の本性は即ち本覺の智なるを以て、報應の色相其の本性に就けば無形なり、之を説て智身と名く、又智性其のまゝ、即ち色相なるを以て、色相のある所即ち法身なり、之を説て法身一切處に徧すと云ふなり、此の如く色心不二、色性即智、智性即色なれば、所現の色相も何丈何由句と云ふ一定の分齊あることなく、衆生の機感に應じて、思のまゝに能く十方世界の無量の菩薩報身莊嚴を示現し、各々差別して然も皆分齊なく、一々十方世界に徧滿するも衝突することなく相妨げざるなり、之れ實に凡夫妄想の分別を以て測り知る所に非ず、真如圓融無碍自在の大用の致す所なり

### 二〇 眞生不二

上來既に解釋分中に於ける眞如門と生滅門との説明を了る、而して其の説明たるや、眞如より生滅を起す次第にて、然も而二の義を以てす、依て今生滅の相を攝して眞如の體に歸入する次第にて、眞生二門不二の義を示す。

復次顯示從生滅門即入眞如門所謂推求五陰色之與心。六塵境界畢竟無念。以心無形相十方求之終不可得如入迷故謂東爲西方實不轉衆生亦爾。無明迷故謂心爲念心實不動。若能觀察知心無念。即得隨順



入眞如門之故。

和譯 復た次に生滅門より即ち眞如門に入ることを顯示せば、謂ゆる五陰を推求するに色と心となり、六塵の境界は畢竟して無念なり、心に形無なし十方に之を求むるに不可得なるを以てなり、人の迷ふが故に東を謂つて西を爲すも方は實に轉ぜざる如く、衆生も亦爾り、無明の迷ひの故に心を謂つて念を爲せども、心は實に動せず、若し能く觀察して心は無念なりと知れば即ち隨順して眞如門に入ることを得るが故なり。

字義 五陰とは新譯にては五蘊と云ふ、陰は陰覆の義にして、煩惱が眞如を覆ひかくす意なり、之れ色受想行識の五にして、色は物にして餘の四は心なり、即ち物質と精神是れなり、即得隨順とは方便觀を云ひ、入眞如門とは正觀を云ふ。

要義 二門相對し相を會して實に入り、以て不二の義を顯はし、生滅門より眞如門に入らしむ、換言すれば生滅の動より眞如の靜に入り、差別より無差別に入らしむるにあり。

生滅門の迷界より眞如の悟界に證入する方法如何と云ふに、先づ色受想行識の五陰即ち一切有爲の萬有を推求すれば、色即ち物と心との二者を出でず、而して其の中、物と云はるゝ六塵の對象を取て考ふるに、畢竟無念にして心以外に存するものに非ず、然らば其心と云はるゝもの如何と云ふに、心は無形なるものにして何等捕捉し得べきものなし

眞生二門  
不二の義

されば心以外に六塵なきのみならず心内に於ても六塵を求め得べからざるや明なり、要するに所緣客觀の物と云はるゝものは不可得にして無相なりと知るべし、次に心に就て考ふるに、喩へば人の東(性心)を誤認して西(念能)とするも、東は常に東なる如く、心性は何處迄も不轉不動なり、衆生の迷も亦爾り、無明妄想の力に依て心性を動じて能念と所念と差別すれども、心性は實に終始一貫して不動なり、故に若し能く觀察して心性は無念なりと知り動を去て靜に入れば、眞如に隨順し近きて終に眞如に證入するを得、之れ即ち色心生滅差別の萬象其のまゝ、心性無差別平等絶對の眞如なり、妄即眞なり、現象即實在なり、生滅即眞如なり、眞生不二なり、之を眞如門に入ると云ふ。

一一 對治邪執

解釋分に三段ある中、既に顯示正義の一段を説き了るを以て、今次に對治邪執の一段を陳ぶ、之れ上に説く大乘の正義に就て、學者の邪解妄執に陥らんことを恐れ、之を辯駁するにあり。

對治邪執者、一切邪執皆依我見。若離於我則無邪執。是我見有二種云何爲二。一者人我見。二者法我見。



**和譯** 對治邪執は一切の邪執は皆我見に依る、若し我を離るれば則ち邪執無し、是の我見に二種あり、云何が二を爲す、一には人我見、二には法我見なり。

**要義** 先づ一切の邪執は我見に依て起ることを標し、此の我見に人我見と法我見の二を開くことを陳ぶ。

一切の邪解妄執は我見を根本として起る、此の我見に人我と法我の二種あり、此の二共に通常云ふ所の外道凡夫の人我若くは法我に非ず、眞如の法を執するものを云ふ、其中人我見とは我執を斷せざる初學大乘の徒の起す妄執にして、法我見とは法執を斷せざる二乗の徒の一切法に體性ありと妄執するものを云ふ。

人我見者依諸凡夫說有五種云何爲五。

**和譯** 人我見は諸の凡夫に依て説くに五種あり云何が五を爲す。

**要義** 人我見に五種を開く、此に凡夫と云ふは前に述ぶる如く初學大乘の徒を云ふ。

○一者聞修多羅說如來法身畢竟寂寞猶如虛空以不知爲破着故即謂虛空是如來性云何對治明虛空相是其妄法體無不實以對色故有是可見相令心生滅以一切色法本來是心實無外色若無色者則無虛空相所謂一切境界唯心妄起故有若心離於妄動則一切境界滅唯一眞

心無所不徧此謂如來廣大性智究竟之義非如虛空相故。

**和譯** 一には修多羅に如來の法身は畢竟して寂寞なること虚空の如しと説くを聞いて、著を破らんが爲なることを知らざるを以ての故に即ち虚空は是れ如來の性なりと謂へり、云何が對治せん虚空の相は是れ其の妄法なり、體無にして實ならざることを明す、色に對するを以ての故に有り、是れ可見の相、心をして生滅せしむ、一切の色法は本來是れ心なるを以て實に外色なし、若し色無ければ則ち虚空の相も無し、謂ゆる一切の境界は唯心なれども妄起るが故に有なり、若し心の妄動を離れば則ち一切の境界滅す、唯一眞心にして徧せざる所なし、此れを如來廣大の性智、究竟の義なりと謂ふ虚空の相の如くに非ずと明すが故に。

**要義** 第一人我見、法身は虚空なりと邪執するを破斥す。

經文に如來の法身は虚空の如しと喩ふ、之れ衆生が色身實有の執着を破せんが爲めなり然るに衆生は之を知らざるが爲め、虚空そのものが直ちに如來法身の體性なりと謂ふに至る、今之を破して云く、虚空なるものは妄法にして實體なきものなり、唯有形の色法物質に對して假りに有りと云ふのみ、此の時は凡夫可見の相にて、色法と同じく妄心上に生滅顯現すべしと雖も、元來一切の色法は皆盡く眞心の顯はれなれば、心外に色法の存すべき理なし、色法既に無からんか之に對して考へらるゝ虚空の存すべき理なし、蓋し一切の境界は唯一絶對の眞心なり、眞心妄動するに依て境界を現す、若し妄動を離れんか、一切の境界あることなく、唯一眞心となる、而して法界實に唯一眞心なれば周徧

虚空を法  
身と執す  
る人我見  
を破す



せざる所なし、之れ如來本覺の性智究竟の義にして、決して世間の謂ゆる太虚の如き虚妄法に非ざるなり。

○二者聞修多羅說世間諸法畢竟體空乃至涅槃真如之法亦畢竟空本來自空離一切相以不知爲破着故。即謂真如涅槃之性唯是空云何對治。明真如法身自體不空具足無量性功德故。

和譯 二には修多羅に世間の諸法は畢竟して體空なり、乃至涅槃真如の法も亦畢竟空なり、本より來た自から空にして一切の相を離れたりと説くを聞きて、着を破らんが爲めなることを知らざることを以ての故に即ち真如涅槃の性は唯是れ空なりと謂へり、云何が對治せん、真如法身は自體不空にして性功德を具足すさか明すが故に。

要義 第二人我見、真如を空なりと執するを破斥す。

般若經等に一切皆空を談じ、世間の諸法は勿論、涅槃真如も畢竟空なりと説くを聞き、然も之れ妄情より執する實有を破せんが爲めなることを知らず、真如涅槃の體性をも空無なりと邪執す、今之を破するには真如不空の理を以てし、大智慧光明等無量の功德を具足することを示すべし。

○三者聞修多羅說如來之藏無有增減體備一切功德之法以不解故。即謂如來之藏有色心法自性差別云何對治以唯依真如義說故。因生

真如を空  
と執する  
人我見を  
破すべし

滅染義示現說差別故。

和譯 三には修多羅に如來の藏は増減あること無し、體に一切功德の法を備ふると説くを聞いて、解せざるを以ての故に、即ち如來の藏に色心の法の自性差別ありと謂へり、云何が對治せん、唯だ真如の義に依て説くを以ての故に、生滅染の義に因て示現するを差別と説くが故に。

要義 第三人我見、真如に色心等差別の法ありと執するを破斥す。

經文に如來藏即ち真如に大智慧光明等無量の功德ありと説くを聞き、謬解して如來藏に吾人が思ふ如き差別ありと執す、今之を破するには、真如門無差別絕對の義に依りて、差別其のまゝ無差別の義を示し、生滅門差別相對の義に依りて、生滅の染法に反顯して無量差別の功德を説くがゆへ、無差別中の差別なることを示し、妄情差別の見解を拂ふべし。

○四者聞修多羅說一切世間生死染法皆依如來藏而有一切諸法不離真如以不解故。謂如來藏自體具有一切世間生死等法云何對治以如來藏從本已來唯有過恒沙等諸淨功德不離不斷不異真如義故。以過恒沙等諸煩惱染法唯是妄有性自本無從無始世來未曾與如來藏相應故。若如來藏體有妄法而使證會永息妄者則無有是處。

真如に差  
別ありと  
執する人  
我見を破  
すべし



**和譯** 四には修多羅に一切世間生死の染法は皆如來藏に依て有り、一切の諸法は眞如を離れずと説くを聞いて解せざるを以ての故に、如來藏の自體に具さに一切世間の生死等の法有りと言へり、云何が對治せん、如來藏には本より已來唯だ過恒沙等の諸の不離不斷不異なる眞如の義あるを以ての故に、過恒沙等の諸煩惱の染法は唯是れ妄有にして性自から本と無なり、無始世より來た未だ曾て如來藏と相應せざるを以ての故に、若し如來藏の體に妄法ありて、而も證會して永く妄を息め使むるさいは、則ち是の處り有ること無し。

**要義** 第四人我見、眞如の體に惡法ありと執するを破す。

經文に世間生死の妄染諸法は皆如來藏に依て有り、一切諸法は眞如を離れずとある眞如隨縁の義を認解して、直ちに如來藏の自體に一切世間妄染惡法を具有せりと執す、今之を破するには、如來藏眞如の本體は本來染淨不二の絶對界なれども、其相大に於ては過恒沙等の淨功德ありて、不離(用)不斷(相)不異(體)なるものなり、然るに煩惱惡法は唯是れ妄情の前に現はるのみにして、其の體性本よりあるものに非ず、何となれば無始より已來、未だ曾て如來藏眞如に隨順相應せざるがゆへなり、若し夫れ如來藏眞如に妄法ありとせんか、修養の功を積まば妄法益々現はるべき理なるに、眞如を修顯し證會する結果は永く妄法を斷滅するに至る、されば妄法のあるべき道理なし、と破斥を加ふるにあり、(此の義は華嚴緣起論と天台實相論と異論あり、立義分中に義を説ける下の詳義の條を見るべし、又教理鈔十七丁、四明教行錄四十六等參照)。

眞如に惡法ありと執する人我見を破すべし

○五者聞修多羅說依如來藏故有生死依如來藏故得涅槃以不解故謂衆生有始以見始故復謂如來所得涅槃有其終盡還作衆生云何對治以如來藏無前際故無明之相亦無有始若說三界外更有衆生始起者即是外道經說又如來藏無有後際諸佛所得涅槃與之相應則無後際故。

**和譯** 五には修多羅に如來藏に依るが故に生死あり、如來藏に依るが故に涅槃を得ると説くを聞いて、解せざるを以ての故に衆生始め有りと謂へり、始めを見るを以ての故に、復た如來所得の涅槃も其の終盡ありて還た衆生と作るを謂へり。

云何が對治せん、如來藏に前際なきを以ての故に無明の相も亦始め有ること無し、若し三界の外に更に衆生ありて始めて起ると説く者は即ち是れ外道經の説なり、又如來藏に後際あること無し諸佛所得の涅槃も之れと相應して則ち後際無きが故に。

**要義** 第五人我見、衆生有始と還作衆生との執着を破す。

經文(釋等)に如來藏に依て生死の迷あり、如來藏に依て涅槃の悟ありと説くを聞いて、無明無始の義を領解せざるを以て、眞前妄後の執を起し、衆生の生ずる始めありと爲す、而して既に眞前妄後の執を起すを以て、隨て悟後却迷の執を起し、一旦如來涅槃の悟を

衆生有始と還作衆生との人我見を破すべし



得たるものも、還た迷の衆生に作ると執す、今之れを破するには、如來藏眞如は無始の存在なるを以て、無明も亦無始の存在なり、無明無始なるを以て衆生の生ずる復たまた無始なり、若し夫れ三界内衆生の外更に衆生ありて始めて生すと云はゞ是れ外道經の説なり(仁王經に云く三界の外別に一衆生界藏ありと説くは)又如來藏眞如は無始なると同時に無終なり(是れ外道大有經の中の説にて七佛の説に非ざるなり)隨て如來藏眞如と相應契當する佛陀涅槃の悟も亦無終なり、何ぞ還た迷ふて衆生と作るの理あらんや、と辯駁を加ふべきなり。

以上人我五執中、初二は空に關する執着、後三は有に關する執着なり、又初一は果に局り、後四は因果に通ずる迷執なりとす。

法我見者、依二乘鈍根故。如來但爲説入無我。以説不究竟見有五陰生滅之法。怖畏生死妄取涅槃。云何對治。以五陰法自性不生。則無有滅本來涅槃故。

和譯

法我見とは二乘の鈍根に依るが故に、如來但だ爲めに人無我のみ説きたまふ、説究竟せざるを以て五陰生滅の法ありと見、生死を怖畏して妄りに涅槃を取る、云何が對治せん、五陰の法は自性不生なるを以て則ち滅あること無し、本來涅槃の故に。

要義

上來五種の人我見を擧げ破斥を加へ了る、依て次に法我見を説く。

法我見を破すべし

法我見とは二乘は鈍根なるを以て、如來は但だ人空法の理のみを説き、未だ法空の理を説かざるを以て、二乘の劣機は法の實有を執じ、生死を怖れて妄に灰身滅智の小果を取る、今之れを破せんには、五蘊身心の法は其のまゝ不生不滅の眞如なるを以て滅することなく、本來常住涅槃なりと、大乘の法義を以て辯駁するにあり。

○復次究竟離妄執者。當知染法淨法皆悉相待無有自相可說。是故一切法從本已來非色非心。非智非識。非有非無畢竟不可說相。而有言說者當知如來善巧方便。假以言說引導衆生。其旨趣皆爲離念歸於眞如。以念一切法。令心生滅不入實智故。

和譯

復次に究竟して妄執を離るるは、當に知るべし染法淨法皆悉く相待にして自相の説く可き有ること無し是故に一切の法は本より已來色に非ず心に非ず、智に非ず識に非ず、有に非ず、有に非ず、無に非ず、畢竟して不可説の相なり、而して言説あるは當に知るべし如來の善巧方便をもて、假りに言説を以て衆生を引導す、其の旨趣は皆念を離れて眞如に歸せしめんが爲なり、一切法を念すれば心をして生滅して實智に入らざら令むるを以ての故に。

要義

上の入法二見は對治離を明し、今は究竟離を陳ぶ。上に明す對治離は各種の邪執を破するに、之れに相應する法義を以てし、能治所治相對して邪執を拂へること、宛も各種の病患に對して、一々相應藥を以てせるが如し、今此

對治離と究竟離との別



の究竟離は一切の邪執を拂はんか、言凡て泯亡し無念の境に達し真如に悟入し、謂ゆる言語道斷心行所滅なるものなり、宛も藥石其の効を奏して病患根治せんか、藥もなく病もなきが如し、然らば其の究竟して妄執を離るゝもの如何と云ふに、元來染法と云ひ淨法と云ひ、皆悉く相對假名のものにして、其の真相は不可得なり、蓋し一切諸法の真如覺體は色にも非ず心にも非ず果位の智にも非ず因位の識にも非ず有にも非ず無にも非ず、畢竟するに離言不可說のものなり、然も言説を以て之れを説明する所以は、佛陀如來の善巧方便にして、無言說中に言説を起し、衆生を引導し、真如離念の境に達せしめんが爲めなり、然るに若し夫れ染淨一切の法を思念せんか、相對生滅に滯りて、真如を悟る實智に入ること能はざるべし、是を以て相對言説の差別を泯亡し絶對離言の妙境界に悟入するを要と爲す。

### 二二二 分別發趣道相

解釋分を三段に分ちし中、既に顯示正義と對治邪執の二段を説明し了る、依て今此に分別發趣道相を説く、而して上二段は大乘の大に當り、理論的哲學的説明なり、今は大乘の乘に當り、實踐的宗教的説明なりとす。

分別發趣道相者謂一切諸佛所證道一切菩薩發心修行趣向義故略說發心有三種云何爲二一者信成就發心二者解行發心三者證發心

和譯 分別發趣道相とは謂く一切の諸佛所證の道に、一切の菩薩發心修行して趣向する義なるが故に、略して發心を説くに三種あり、云何か三と爲す、一には信成就發心、二には解行發心、三には證發心なり。

要義 分別發趣道の名義を標し、三種の階梯を擧ぐ。

分別發趣道相とは道に發趣する相を分別すと訓む、即ち諸佛所證の佛果菩提の道に一切の菩薩が菩提心を發し修行して、趣き向ふ義相を説明するにあり、換言すれば、志を起して無上道に進趣する徑路過程を論ずるものなり、此の徑路過程に大別三種あり、一に信成就發心、此は十信位に信心を修習し、其の信成就して十住不退位に進入するを云ふ二に解行發心、此は十行十廻向位に法空の理を解し、真如に隨順して六度の妙行を修養するを云ふ、三に證發心、此は十地位に真如を證するを云ふ、即ち前二は地前の相似比觀にして後一は地上の眞實正觀なり。

信成就發心者依何等人修何等行得信成就堪能發心  
所謂依不定聚衆生有熏習善根力故信業果報能起十善厭生死苦  
欲求無上菩提得值諸佛親承供養修行信心經一萬劫信心成就故諸

分別發趣道相の名義  
發心三種の相を問ふ



佛菩薩教令發心。或以大悲故能自發心。或因正法欲滅以護法因緣故能自發心。如是信心成就得發心者。入正定聚。畢竟不退。名住如來種中。正因相應。

若有衆生善根微妙。久遠已來。煩惱深厚。值於佛。亦得供養。然起入天種子。或起二乘種子。設有求大乘者。根則不定。若進若退。或有供養諸佛。未經一萬劫。於中遇緣亦有發心。所謂見佛色相而發其心。或因供養衆僧而發其心。或因二乘之人教令發心。或學他發心。如是等發心。悉皆不定。遇惡因緣。或便退失。墮二乘地。

和譯

信成就發心とは何等の人に依り、何等の行を修し、信成就を得て、能く發心に堪ゆるや。

謂ゆる不定聚の衆生に依る、熏習する善根力有るが故に、業の果報を信じて能く十善を起し、生死の苦を厭ひ、無上菩提を欲求し、諸佛に値ふことを得て親承供養して信心を修行す、一萬劫を経て信心を成就するが故に、諸佛菩薩教へて發心せしめ、或は大悲を以ての故に能く自から發心し、或は正法の滅せんを欲するに因て護法の因縁を以ての故に能く自から發心す、是くの如く信心成就して發心を得る者は正定聚に入り、畢竟して退かざれば、如來種の中に住して正因相應すと名く。

若し衆生あり善根微妙にして久遠より已來、煩惱深厚なれば、佛に値ひ亦供養することを得るも、然も人天の種

子を起し、或は二乗の種子を起す、設ひ大乘を求むる者あれども、根則ち不定にして若しは進み若しは退く、或は諸佛を供養することあれども未だ一萬劫を経ず、中に於て縁に遇うて亦發心するものあり、謂ゆる佛の色相を見て其心を發し、或は衆僧を供養するに因りて其心を發し、或は二乗の人の教令に因て發心し或は他を學て發心す、是くの如き等の發心は悉く皆不定なり、惡の因縁に遇へば或は便ち退失して二乘地に墮す。

要義

第一信成就發心中、先づ信心成就の相を陳ぶ。

信成就發心とは如何なる人が爲すか、如何なる修行を爲すか、如何に信心成就して發心することを得るかと云ふに、先づ能修の人を擧ぐれば不定聚(十住)の人なり、次に其の修行を示せば、宿世より内外兩熏せる善根あるがゆゑ、能く善惡二業の果報を信じて、十善を起し生死の苦を厭ひ無上菩提を願求し諸佛に値ひて親しく供養し、以て信心を修行し、一萬劫を経て信心成就することを得、後に其の發心を説けば、斯く信心成就するを以て、佛菩薩教へて發心せしめ、或は衆生救済の大悲を以て自ら發心し、或は正法の衰滅を慨き護法の精神より自ら發心す、是の如く信心成就して能く發心するものは正定聚不退位(十住)に進み、當來必ず佛となるべき金剛の種子を得、本覺内熏の正因と相應し、最早二乘地に墮することなし。

以上は不定聚中の勝機なれども、若し不定聚中の劣機に就ては如何と云ふに、此は善根微少にして然も久遠劫來煩惱深厚の人なるを以て、佛に値ひ供養すと雖も、只五戒十善



を修行して人天の種子を起し、四諦十二因縁を修行して二乗の種子を起すに止る、設ひ大乘の佛果を求むるものあるも、根機不定にして一進一退常ならず、或は諸佛を供養し未だ一萬劫を経ざるに、佛の色相を見るときか、衆僧を供養するときか、劣れる二乗の教令に因るときか、他の教を學習するときの縁に遇ふて發心することあるも、此等の發心は悉く皆不定にして、舍利弗等の如く惡の因縁に遇ふ時は二乘地に墮落することありと知るべし。

復次信成就發心者發何等心略說有三種云何爲三。一者直心。正念眞如法故。二者深心。樂集一切諸善行故。三者大悲心。欲拔一切衆生苦故。

和譯 復次に信成就發心とは何等の心を發すか、略して説くに三種あり、云何が三と爲す、一には直心、正しく眞如の法を念するが故に、二には深心、樂うて一切諸の善行を集むるが故に、三には大悲心、一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に。

要義 第一信成就發心中、次に發心に於ける三心を示す。

發心に三種あり、一に直心、別の岐路なく正直に眞如を念することにて二行の根本なり。二に深心、心源に歸向せんが爲め一切の善行を樂い集むることにて自利行なり、三に大悲心、衆生救済の大悲心にして利他行なり、此の三心横には初めより皆悉く具足すべし。

信成就發心の三心を問ふ

と雖も、若し堅に配すれば順次に十住十廻向に當ると云ふべし、『義記』には此三心を三聚戒三徳三廻向に配せり、即ち左の如し。

- 直心——攝律儀戒——斷——實際廻向——止惡——根本
- 深心——攝善法戒——智——菩提廻向——修善——自利
- 大悲心——攝衆生戒——恩——衆生廻向——救済——利他

問曰上說法界一相佛體無二何故不唯念眞如復假求學諸善之行。

答曰譬如大摩尼寶體性明淨而有鑛穢之垢。若人雖念寶性不以方便種種磨治終無得淨。如是衆生眞如之法體性空淨。而有無量煩惱染垢。若人雖念眞如不以方便種種熏修亦無得淨。以垢無量無邊徧一切法故。修一切善行以爲對治。若人修行一切善法自然歸順眞如法故。略說方便有四種云何爲四。

和譯 問うて曰く上に法界一相佛體無二と説く、何か故ぞ唯だ眞如を念せずして復た諸善の行を求學することゝ假るや。

答へて曰く譬へば大摩尼寶の體明淨なれども而も鑛穢の垢あり、若し人寶性を念すも雖も方便を以て種々に磨治せざ



れば終に淨を得ること無きが如し、是くの如く衆生の眞如の法も體性空淨なれども無量煩惱の染垢あり、若し人眞如を念ずるも方便を以て種々に熏修せざれば亦淨きを得ること無し、垢無量無邊にして一切法に徧きを以ての故に、一切の善行を修して以て對治を爲す、若し人一切の善法を修行すれば自然に眞如の法に歸順するが故に、略して方便を説くに四種あり、云何が四と爲す。

**要義** 發心に就て直心の外、更に深心大悲心を説く所以を、問答消釋す。

問ふ、上同相の下に於て、法界一相佛凡同體にて唯一眞如なりと説く、然らば唯眞如のみを念せば事足るべし、何ぞ深心大悲心等を發し善行を修するか、答ふ、譬へば大摩尼(意如)寶珠の體性は明淨なれども鑛穢の垢あるを以て、音響性を念すとも、若し方便を以て之れを磨治せざらんか、終に明淨なる光輝を發散することなかるべし、今復た然り、衆生の有する眞如も、其の體性は本來空淨なれども、無量無邊の煩惱あるを以て、音眞如を念すとも、若し善行を修せざらんか、畢竟するに明淨なること能はず、善行を修するの必要なること夫れ此の如し、蓋し善行なるものは煩惱妄法に違し、眞如本覺に順するを以て、深心大悲心を發し善行を修すれば、自然に眞如に歸順すべし、然り而して眞如に隨順する方便無量なりと雖も、略説するに四種とす、即ち下の如し。

○一者行根本方便 謂觀一切法自性無生、離於妄見、不住生死、觀一切

直心の外  
更に深心  
大悲心を  
説く所以

法、因縁和合、業果不失、起於大悲、修諸福德、攝化衆生、不住涅槃、以隨順法性、無住故。

○二者能止方便 謂慚愧悔過能止一切惡法、不令增長、以隨順法性、離諸過故。

○三者發起善根增長方便 謂勤供養禮拜三寶、讚歎隨喜勸請諸佛、以愛敬三寶、淳厚心故、信得增長、乃能志求無上之道、又因佛法僧力所護故、能消業障、善根不退、以隨順法性、離痴障故。

○四者大願平等方便 所謂發願盡於未來、化度一切衆生、使無有餘、皆令究竟無餘涅槃、以隨順法性、無斷絶故、法性廣大徧一切衆生、平等無二、不念彼此、究竟寂滅故。

**和譯** 一には行根本方便、謂く一切の法自性無生なりと觀じて妄見を離れ生死に住せず、一切の法は因縁和合して業果失せずと觀じて大悲を起し諸の福德を修し衆生を攝化して涅槃に住せず、法性の無住に隨順するを以ての故に、二には能止の方便、謂く漸愧悔過して能く一切の惡法を止めて增長せしめず、法性の諸過を離るゝに隨順するを以ての故に。







通ず四に實行を歎す。

一に勝徳とは初住位の菩薩は以上三種の心を發すを以て、相似比觀の智を以て少分眞如法身の理體を見ることを得、眞如を見るを以て己が願力に隨て、自由に八相成道を示現することを得るなり、二に微過とは初住位の菩薩は有漏の業未だ悉く斷せざるを以て變易生死の微苦あり、又故留潤生の場合には分段生死の苦あるも、吾人凡夫の如き業繫のものに非ずして、度生の大願より發起するがゆゑ、其の壽命も伸縮自在の力を有す、三に權教を通ずとは經文に十住の菩薩にして三惡趣に退墮するものありと説く所あるは眞實の退墮に非ず、未だ正定聚に入らざる十信位のことを擊勵せんが爲めなり、四に實行を歎すとは十住位の菩薩は一度發心せんか、一切法本來涅槃の理を信知するを以て、二乘地に退墮するをも畏れず、涅槃を得るに永劫の修行を要すと聞くも畏れず、畢竟勇猛勤精進なり。

○解行發心者當知轉勝以是菩薩從初正信已來。於第一阿僧祇劫將欲滿故。於眞如法中深解現前所修離相。以知法性體無慳貪故。隨順修行檀波羅蜜。以知法性無染離五欲過故。隨順修行尸羅波羅蜜。以知法

性無垢離瞋惱故。隨順修行羼提波羅蜜。以知法性無身心相離懈怠故。隨順修行毘黎耶波羅蜜。以知法性常定體無亂故。隨順修行禪波羅蜜。以知法性體明離無明故。隨順修行般若波羅蜜。

和譯

解行發心とは當に知るべし轉た勝れたり、是の菩薩は初めの正信より已來第一阿僧祇劫に於て時に滿んざ欲するを以ての故に、眞如の法中に於て深解現前して所修相を離れたり。

法性の體は慳貪なしと知るを以ての故に、隨順して檀波羅蜜を修行す。

法性は無染にして五欲の過を離るると知るを以ての故に、隨順して尸羅波羅蜜を修行す。

法性は苦なく瞋惱を離るると知るを以ての故に、隨順して羼提波羅蜜を修行す。

法性には身心の相なく懈怠を離るると知るを以ての故に、隨順して毘黎耶波羅蜜を修行す。

法性は常に定にして體に亂無しと知るを以ての故に、隨順して禪波羅蜜を修行す。

法性の體は明にして無明を離るると知るを以ての故に、隨順して般若波羅蜜を修行す。

要義 第二解行發心を陳ぶ。

解行發心とは前の正信(初住)より進みて、今や既に十行に入り又將に十回向の行滿ち、三大阿僧祇劫の中初阿僧祇を終らんとするを以て、眞如に對して深解を生ず、深とは前位の淺に對して深と云ひ、解とは後位の證に及ざるを以て解と云ふ、斯く深解現前するがゆへ、其の修相能く眞如の無相に合致し、終日能行すれども其の相を認めず、全く修



相を離る、乃ち眞如に隨順して六波羅密を修す、波羅密は譯して到彼岸と云ひ略して度と云ふ、先づ眞如には差別より起る慳貪なきを以て、之れに隨順して檀(施)波羅密を修し、又眞如には染汚なく色聲香味觸の五欲の過を離れ、宇宙自然の規律何の過る所もなし、之れに隨順して尸羅(持)波羅密を修し、又眞如には苦惱の塵垢なく隨て瞋惱を離る、之れに隨順して羼提(忍)を修し、又眞如は身心の相を遠離するを以て懈怠あることなし、之れに隨順して毘黎耶(進)を修し、又眞如は常住にして散亂することなし、之れに隨順して禪(禪那)を修し、又眞如は其の體明淨にして無明なし、之れに隨順して般若(慧)を修す、之れ實に解行發心の眞如隨順なりとす。



○證發心者。從淨心地乃至菩薩究竟地。證何境界。所謂眞如。以依轉識

說爲境界。而此證者無有境界。唯眞如智名爲法身。是菩薩於一念頃能至十方無餘世界。供養諸佛。請轉法輪。唯爲開導利益衆生。不依文字。或示超地速成正覺。以爲怯弱衆生故。或說我於無量阿僧祇劫。當成佛道。以爲懈怠衆生故。能示如是不數方便不可思議。而實菩薩種性根等發心即等。所證亦等。無有超過之法。以一切菩薩皆經三阿僧祇劫故。但隨衆生世界不同。所見所聞根欲性異。故示所行亦有差別。

和譯

證發心とは淨心地より乃至菩薩究竟地に何の境界を證するか、謂ゆる眞如なり、轉識に依るを以て説いて境界と爲す、而して此證とは境界有ること無し、唯だ眞如の智を名けて法身と爲す。是の菩薩は一念の頃に於て能く十方無餘の世界に至りて諸佛を供養し、轉法輪を請し、唯だ衆生を開導し利益せんが爲めに文字に依らず、或は地を超越して速に正覺を成すと示す怯弱の衆生の爲めなるを以ての故に、或は我れ無量阿僧祇劫に於て佛道を成すべしと説く懈怠の衆生の爲めなるを以ての故に、能く是くの如き無數の方便を示すこと不可思議なり。

而れども實は菩薩の種性は根も等しく發心も則ち等しく、所證も亦等しくして超過の法あること無し、一切の菩薩は皆三阿僧祇劫を経るを以ての故に、但だ衆生世界同じからず、所見所聞根欲性異なるに隨ふが故に、所行を示すこと



亦差別あるのみ。

要義 第三證發心を陳ぶ、初に發心の體。

證發心とは如何なる地位にて爲すか、曰く初地の淨心位より第十地究竟位に至る菩薩位にて證す、如何なる境界を證するか、眞如是れなり、證すと云ふは根本無分別智を以て眞如無差別の理體を照することなれば、能所を離れ主觀客觀を超絶し、絶對一相一枚なれば、別に境界と云はるゝものあるなし、然も今特に境界と云ふは十地の菩薩未だ果位に達せざるを以て、後得有分別智の中業識盡きず、隨て轉現の二識猶存するあり、依て轉識に依る現識中に映現する眞如を指して境界と云ふ、根本智に就んか本より境界あることなしと知るべし、依て此の眞如根本智を指して其のまゝ法身と名く。

次に此の菩薩根本無分別智の上に顯はるゝ後得有分別智の勝用如何と云ふに、此の智を以て差別界を照すがゆへ、一切の差別照さざるなく、苦惱の衆生一々現前す、是に於て救済の大悲を起すに至る、即ち微妙の文字言語を以て稱讃を受くる私意あるなく一意専心衆生を攝化せんが爲め、一念の頃に能く十方無邊の世界に至り諸佛を供養し説法を請ひ、又長時の修行に對して怯弱を懷く衆生の爲めには劫數を経ず地を超越して正覺を成じ、又佛道修し易しと懈慢する衆生の爲めには無量劫を要すべしと説く等、度生攝化の

證發心の  
大要  
根本智の  
行體

後得智の  
勝用

皆經三祇  
とせば始  
教位の説  
さなる此  
の雜問云  
何が通ず  
るや

發心三種  
の相

方便無量不可思議なり。

然れども實際に於ては此の菩薩の種性は根も發心も所證も等しく、決して超過の法あるなく、地前に一阿僧祇、地上に二阿僧祇、合して皆三阿僧祇劫の修行を要するなり、當衆生の感見に隨て其の示現する所、種々差別するのみ。

又是菩薩發心相者、有三種心微細之相。云何爲三。一者眞心無分別故。二者方便心自然徧行利益衆生故。三者業識心微細起滅故。

和譯 又是の菩薩發心の相には三種の心微細の相あり、云何が三と爲す、一には眞心分別無きが故に、二には方便心、自然に徧く行して衆生を利益するが故に、三には業識心微細に起滅するが故に。

要義 次に發心の相を陳ぶ。

十地の菩薩發心の相に三種の相あり、一に眞心とは眞如の理體を證する根本智なり、二に方便心とは衆生攝化の後得智なり、三に業識心とは佛果圓滿の徳に異り、微細起滅の累あるを示す、理實には此の菩薩未だ業轉現の阿黎耶識ありと知るべし。

又是菩薩功德成滿於色究竟處。示一切世間最高大身。謂以一念相應慧、無明頓盡名一切種智。自然而有不思議業能現十方利益衆生。問曰虛空無邊故世界無邊世界無邊故衆生無邊衆生無邊故心行差別亦復。



無邊。如是境界不可分齊。難知難解。若無明斷無有心想云何能了名一切種智。

答曰一切境界本來一心離於想念。以衆生妄見境故心有分齊。以妄起想念不稱法性故不能決了。諸佛如來離於見想無所不徧。心眞實故卽是諸法之性。自體顯照一切妄法有大智用無量方便。隨諸衆生所應得解。皆能開示種種法義。是故得名一切種智。

和譯

又是の菩薩は功德成滿し、色究竟處に於て、一切世間最高大の身を示す、謂く一念相應の慧を以て無明頓に盡るを一切種智と名く、自然に不思議の業あり、能く十方に現じて衆生を利益す。

問うて曰く虚空無邊なるが故に世界無邊なり、世界無邊なるが故に衆生無邊なり、衆生無邊なるが故に心行の差別も亦復無邊なり、是くの如きの境界は分齊すべからず、知り難く解し難し、若し無明斷せば心想あること無し、云何ぞ能く了するを一切種智と名けん。

答へて曰く一切の境界は本來一心にして想念を離る、衆生妄りに境界を見るを以ての故に心に分齊あり、妄りに想念を起して法性に稱はざるを以ての故に決了すること能はず、諸佛如來は見想を離れて徧せざる所なし、心眞實なるが故に則ち是れ諸法の性なり、自體に一切の妄法を顯照す、大智用無量の方あり、諸の衆生の應に解を得べき所に隨つて種々の法義を開示す、是の故に一切種智と名くることを得。

要義 後に功德成滿を明し、更に一切種智に就て問答を設け疑を解く。

菩薩十地位正して究竟する時は功德成滿して佛果位に達す、然る時は色界の頂上なる摩醯首羅天に於て、一切世間の色身中最も高大なる身を示現し、只一念に全分眞如に契へる始覺の智慧を以て根本無明を頓斷す、無明頓斷するを以て一切種智を顯現す、一切種智とは根本後得無碍の智と云はれ又眞俗無碍の智とも云ふ、徧く一切照さるることなきの智なり、此の智の上に自然に不思議の業用ありて、能く十方に現じて衆生を攝化し利益を與ふ、『義記』に一切種智を智淨相に不思議業を不思議業相に配せるもの、共に本覺隨染の成する所なればなり。

一切種智に關する疑とは宇宙は廣大無邊なり、人生は無量無邊なり、其間に於ける差別亦復た無邊にして難知難解のものたり、一切種智と雖も焉ぞ能く一々了知するを得ざるべし、斯く客觀對象の上に於て疑あるのみならず、主觀の上に於ても、無明頓斷して心想あることなしと云はれ、一切種智一々了知するの義と矛盾すべし、甚だ疑なき能はざるものあり如何と云ふに、蓋し客觀對象の境界は本來一心の外なく、此の一心たるや絶對平等にして心想を離れたり、是を以て一切照さる所なきなり、衆生は妄分別の心想あるを以て、心外に境を認めて自由ならず、又能く照さる所あり、然るに諸佛如來は

一切種智に關する疑問



主客の見相を離れ、心想全くなきを以て、徧せざる所なく照さざる所なく、隨て攝化度生の大悲を起し、種々の法義を開示するに至る、何の疑ふ所かあらん。

又問曰。若諸佛有自然業能現一切處利益衆生者。一切衆生若見其身。若親神變若聞其說。無不得利。云何世間多不能見。

答曰。諸佛如來法身平等徧一切處。無有作意故而說自然。但依衆生心現。衆生心者。猶如於鏡。鏡若有垢色像不現。如是衆生心若有垢法身不現故。

和譯

又問て曰く若し諸佛に自然の業ありて能く一切處に現じ衆生を利益すまならば、一切衆生若しは其身を見

若しは神變を親、若しは其說を聞いて、利を得ざることを無かるべし、云何ぞ世間に多く見ることを能はざるや。

答へて曰く諸佛如來の法身は平等に徧うして作意あること無し、故に自然と名く、但だ衆生の心に依て現す衆生の心は猶鏡の如し、鏡若し垢あれば色像現せず、是くの如く衆生の心に若し垢あれば法身現せざるが故に。

要義

前に一切種智に關する疑を解き、今は自然業智に關する疑を消釋す。

前に諸佛如來には自然に不思議の業ありて、能く一切處に示現して衆生を利益すと説く然るに現に衆生之を見聞せざる所以のもの何ぞや、曰く、諸佛如來の法身は眞如平等無差別にして宇宙に徧滿し、然も作意分別の想を絶して自然なり、但だ衆生の感見に應ず

衆生佛身  
を見ざる  
所以を問  
ふ

るのみ、是を以て衆生に塵垢あらんか、猶鏡面に垢あれば萬像映現せざる如く、法身上に顯現する報化二身顯現するに由なし、『和讃』に煩惱に眼さへられて攝取の光明見ざれども大悲ものうきことなくて常に我が身を照らすなり、と味ふべし。

### 第八章 修行信心分

起信論に五分ある中、今は第四の修行信心分なり、第二立義分は大乘を略説し、第三解釋分は大乘を廣説し、共に大乘の何物たるかを知らしむ、依て今此に大乘に向て信仰を起し修行するの要を陳ぶ、謂ゆる四信五行にして、即ち大乘起信なる題號に就ては起信の二字に當る。

已説解釋分。次説修行信心分。是中依未入正定聚衆生故説修行信心。何等信心云何修行。略説信心。有四種云何爲四。

和譯

已に解釋分を説く、次に修行信心分を説かん、是の中に未だ正定聚に入らざる衆生に依るが故に、修行信心を説く、何等の信心にて、云何か修行せん、略して信心を説くに四種あり、云何か四を爲す。

要義

先づ前を結びて後を起し、次に能修の人を擧げ、後に信心と修行を標す。

能信の人とは未入正定聚即ち不定聚のものを云ふ、前の分別發趣道相も不定聚の機なれ

分別發趣  
と修行信  
心分の  
大別



ども、既に信心成就のものをして、三種の發心を示して正定聚に入らしめ主として三賢十地の修行を説くにあり、然るに今の修行信心分は同じく不定聚の機に就くも、未だ信心成就せざるがゆゑ、特に四信五行の法を説き信心を成就せしむるを主眼とす、されば前は勝機の菩薩の爲めにし、今は劣機の行者の爲めにす、随て前は理想的實踐論にして今は實際的實踐論なりと云ふべし、是れ分別發趣道相が修行信心分の能信能行から所信所行の對象と目せらるゝ大乘を、説明する所の解釋分中に説かるゝ所以なり。

一者信根本所謂樂念眞如法故。

二者信佛有無量功德常念親近供養恭敬發起善根願求一切智故。

三者信法有大利益常念修行諸波羅蜜故。

四者信僧能正修行自利利他常樂親近諸菩薩衆求學如實行故。

和譯

一には根本を信ず、謂ゆる眞如の法を樂念するが故に。

二には佛に無量の功德有りを信じ、常に念じて親近し供養し恭敬して善根を發起し、一切智を願求するが故に。

三には法に大利益有りを信じ、常に念じて諸の波羅蜜を修行するが故に。

四には僧能く正しく自利々他を修行すを信じ、常に樂つて諸の菩薩衆に親近し如實行を行を求學するが故に。

要義 一心二門三大四信五行と云はるゝ中の四信を陳ぶ。

四信の説

四信とは眞如と佛と法と僧とを信するを云ふ、一に眞如を信ずとは眞如は宇宙萬有の根本なるを以て之を樂念し、二に佛を信ずとは佛には大智慧光明等無量の功德ありと信じて常に供養恭敬し、三に法を信ずとは教法には大利益ありと信じて常に六度の修行を爲し、四に僧を信ずとは僧は能く眞如に隨順して二利を行すと信じて常に菩薩衆に親近し教を受け修行するを云ふ、之を要するに眞如は根本にして、佛法僧の三寶は眞如の顯現に外ならず、即ち眞如を人格的理想的に表職したるものは佛、眞如を哲學的理論的に表現したるものは法、眞如を倫理的實際的に表現したるものは僧なりと云ふべく、又眞如體相用の三大を順次に佛法僧の三寶に配すと云ふを得べく、終極は唯一眞如に結歸するや明なり、然れども今は窮行實踐を主眼とするがゆゑ、信仰の對象を四となし、不壞の信心を鼓吹するにあり。

修行有五門能成此信云何爲五一者施門二者戒門三者忍門四者進門五者止觀門。

和譯

修行に五門あり能く此信を成す、云何か五と爲す、一には施門、二には戒門、三には忍門、四には進門、五には止觀門なり。

要義

一心二門三大四信五行と云はるゝ中の五行を陳ぶ。

五行の説



布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜中、禪定(止)智慧(觀)を合して止觀とし  
五行と爲す、之れ止觀の二は不離一對の法にして、然も均等を必要とするがゆゑ、合し  
て一門と爲せり、加之一心二門三大四信五行と増數の法に則り、巧に本論を組織せし深  
意の存するや明なり。

云何修行施門。若見一切來求索者。所有財物隨力施與。以自捨慳貪。令  
彼歡喜。若見厄難恐怖危逼。隨已堪任。施與無畏。若有衆生來求法者。隨  
已能解。方便爲說。不應貪求名利恭敬。唯念自利。他廻向菩提故。

和譯 云何が施門を修行せん、若し一切の來りて求索する者を見れば、有らゆる財物力に隨つて施與し、自から慳  
貪を捨つるを以て、彼れなして歡喜せしむ、若し厄難恐怖危逼を見れば、己れが堪任するに隨つて無畏を施與し、若し  
衆生の來りて法を求むる者あれば、己れが能解に隨つて方便して爲めに説いて應に名利恭敬を貪求すべからず、唯だ  
自利々他を念じ、菩提に廻向するが故に。

一、施門

要義 第一施門を陳ぶ。

布施を行すとは我が財物を施すを財施と云ひ、人の危難を除くを無畏施と云ひ、人を教  
導するを法施と云ふ、世に此の三施を智仁勇の三徳に配するものあり、即ち財施は仁、  
無畏施は勇、法施は智なりとす、而して三施共に能施と所施と施物の三相に執着せざる

三施の説  
明

を布施行の上乗と爲す。

云何修行戒門。所謂不殺。不盜。不婬。不兩舌。不惡口。不妄言。不綺語。遠離  
貪嫉。詐欺。詭曲。瞋恚。邪見。若出家者。爲折伏煩惱故。亦應遠離憤鬧。常處寂  
靜。修習少欲。知足。頭陀等行。乃至小罪。心生怖畏。慚愧改悔。不得輕於如來  
所制禁戒。當護譏嫌。不令衆生妄起過罪故。

和譯 云何が戒門を修行せん、謂ゆる不殺、不盜、不婬、不兩舌、不惡口、不妄言、不綺語、貪嫉、欺詐、詭曲  
瞋恚、邪見を遠離す、若し出家の者は煩惱を折伏せんが爲めの故に、亦應に憤鬧を遠離し、常に寂靜に處して少欲知  
足頭陀等の行を修習し、乃至小罪にも心に怖畏を生じて慚愧し改悔して、如來制したまふ所の禁戒を輕んずることな  
得ざるべし、當に譏嫌を護り衆生をして妄りに過罪を起さしめざるべきが故に。

要義 第二戒門を陳ぶ。

佛陀の戒法を大に分て攝律儀戒(止)、攝善法戒(善)、攝衆生戒(度)の三門と爲す、今の文に  
配すれば若出家より上は攝律儀戒、以下は攝善法戒、當護譏嫌以下は攝衆生戒に當る、  
攝律儀戒は通常身三(殺生、偷盜、邪淫)口四(兩舌、惡口、妄語、綺語)意三(貪、瞋、痴)の十惡を禁ず、今は此の外に嫉  
と詐欺と詭曲の三を加ふ、又攝善法戒に當る文に於ては、特に出家の爲め如來所制の禁  
條を守るべきを注意し、憤鬧なる都會を避けて閑寂なる地に居をトし、欲を少くして足

一、戒門



るを知り、頭陀等の行を修し、微小なる罪過をも怖れ慚愧し改悔するを以てせり、頭陀とは抖擻と譯し、煩惱を抖擻ふ爲め托鉢を爲すを云ふ、終りに攝衆生戒に當る文に於ては、出家不謹慎の爲め世人をして嫌ひ譏らしめ、彼をして妄に正法を誹謗する罪過を起さしめざるやう注意を加へらる。

云何修行忍門所謂應忍他人之惱心不壞報亦當忍於利衰毀譽稱譏苦樂等法故。

和譯 云何か忍門を修行せん、謂ゆる應に他人の惱ますを忍て心に報を懷かざるべし、亦當に利衰毀譽稱譏苦樂等の法を忍ぶべきが故に。

要義 第三忍門を陳ぶ。

忍辱とは忍耐のことにて、他より惱まざるも復讐の心を起さざるを他不饒益忍と云ふ即ち他の饒益ならざるを忍ぶの意なり、又利害毀譽褒貶等の爲めに心を動さざるを安受忍と云ふ、即ち不動の精神なり、俚諺に云く、『出來る堪忍誰もする出來ぬ堪忍するが堪忍』と味ふべし。

云何修行進門所謂於諸善事心不懈退立志堅強遠離怯弱當念過去久遠已來虛受一切身心大苦無有利益是故應勤修諸功德自利利他

三、忍門

速離衆苦。

和譯 云何か進門を修行せん、謂ゆる諸の善事に於いて、心に懈退せず、志を立つること堅強にして怯弱を遠離し、當に過去久遠已來虚しく一切身心の大苦を受けて利益有ること無きを念すべし、是の故に應に勤めて諸の功德を修め自から利し他を利用して速に衆苦を離るべし。

要義 第四進門を陳ぶ。

精進とは勉強のことにて、先づ諸の善事に於て怠ることなく、又志を立つること堅固にして卑怯なることなく、又自身輪廻生死の大苦を解脱せんが爲め二利を行するを云ふ。

復次若人雖修行信心以從先世來多有重罪惡障故爲邪魔諸鬼之所惱亂或爲世間事務種種牽纏或爲病苦所惱有如是等衆多障礙是故應當勇猛精勤晝夜六時禮拜諸佛誠心懺悔勸請隨喜廻向菩提常不休廢得免諸障善根增長故。

和譯 復次に若し人信心を修行すと雖も、先世より來た多く重罪惡業障あるを以ての故に邪魔諸鬼の爲めに惱亂せられ、或は世間事務の爲めに牽纏せられ、或は病苦の爲めに惱まる、是くの如き等衆多の障礙あり、是故に應に勇猛精勤して晝夜六時に諸佛を禮拜し、誠心に懺悔し、勸請し隨喜して菩提に廻向すべし、常に休廢せざれば諸障を免るゝことを得ん、善根增長するが故に。

四、進門



要義 精進に於ける障礙を擧げ、除障の方法を陳ぶ。

信心を修行せんとするも、無始曠劫より迷に迷を重ねたるゆへ、邪魔諸鬼の爲め、世間俗務の爲め、病患の爲め、思ふ如く修行することを得ざる場合續出すべし、是を以て晝夜六時に諸佛を禮拜し、至心懺悔し、大徳を勸請し、善事に隨喜し、菩提に廻向して休息なからんか、善根増長して諸の障礙を除去することを得べし。

云何修行止觀門。所言止者謂止一切境界相。隨順奢摩他觀義故。所言觀者謂分別因緣生滅相。隨順毘鉢舍那觀義故。云何隨順以。此二義漸漸修習不相捨離。雙現前故。

和譯

云何が止觀門を修行せん、言ふ所の止とは謂く一切の境界相を止め奢摩他に隨順する義の故に。言ふ所の觀とは謂く因緣生滅の相を分別して毗鉢舍那觀に隨順する義の故に。云何が隨順する此の二義を以て漸々に修習して相捨離せず雙へ現前するが故に。

字義

單に止と云ひ觀と云ふは方便の方なり、奢摩他は翻じて止と云ふ今は止に對して止の成就せる正止を意味す、又奢摩他觀と觀の字を加ふるもの、觀に通別あり通じては禪定智慧を呼び別しては智慧に名く、毗鉢舍那是翻じて觀と云ふ前の如く正觀なり。要義 第五止觀門を陳ぶ、先づ略して止觀の相を陳ぶ。

五、止觀門

止觀總說

止とは吾人は妄分別を以て六塵の境界を認む、是を以て此等一切境界の相を止め、正止に一致せしむるやう修行するを云ふ、觀とは一切諸法の因緣生滅する相を觀察し、正觀に一致せしむるを云ふ、止に依らざれば心散亂し觀に非ざれば心沈滯す、依て此の二方便を漸々修習して捨離せざらんか、止觀雙びて現前し妙境に達するを得ん、實は止は眞如門の方なり此に因りて根本智を得べく觀は生滅門の方なり此に因りて後得智を得べく然も二門二智共に唯一眞如の兩面觀なれば雙現するや明なり。

若修止者住於靜處端坐正意不依氣息不依形色不依於空不依地水火風乃至不依見聞覺知一切諸想隨念皆除亦遣除想以一切法本來無想念念不生念念不滅亦常不得隨心外念境界後以心除心若心馳散即當攝來住於正念是正念者當知唯心無外境界即復此心亦無自相念念不可得若從坐起去來進止有所施作於一切時常念方便隨順觀察久習淳熟其心得住以心住故漸漸猛利隨順得入眞如三昧深伏煩惱信心增長速成不退唯除疑惑不信誹謗重罪業障我慢懈怠如是等入所不能入。



**和譯** 若し止を修する者は靜處に住し端坐して意を正し、氣息に依らず、形色に依らず、空に依らず、地水火風に依らず、乃至見聞覺知に依らず、一切の諸想念に隨つて皆除き、亦除想をも遣る、一切の法は本來無想なるを以て、念々生ぜず念々滅せず、亦常に心外に隨つて境界を念じ後ち心を以て心を除くことを得ざれ、心若し馳散せば即ち當に攝し來つて正念に住すべし、是の正念とは當に知るべし、唯心にして外の境界無し、即ち復た此の心も亦自相なし念々不可得なり、若し坐より起て去來進止に施作する所あらば、一切時に於いて常に方便を念じて隨順觀察すべし、久習淳熟すれば其心住することを得、心住するを以ての故に漸々に猛利にして眞如三昧に隨順し得入して深く煩惱を伏し信心增長して速に不退を成す、唯だ疑惑と不信と誹謗重罪業障と我慢と懈怠を除く、是くの如き等の人は入ること能はざる所なり。

**要義** 次に別して止を明す中、止を修する方法を述べ、遂に眞如三昧を得ることを陳ぶ。

止を修するものは先づ靜處に住すること、持戒清淨なること、衣食具足すること、善知識を得ること、諸の俗務を息むることの五縁を具備すべし、今は靜處のみを擧げ他を略す、次に禪の座法に則り結跏趺座以て身を端座せしめ、次に世間の名利を求めず以て心を正ふし、斯くして眞如門に依りて唯心無境を觀ず、隨て氣息に依て數息觀、形色に依て骨鏤觀を修することなく、空とか又地水火風乃至見聞覺知の境に依て修することなく、所想能想共に除遣するにあり、之れ一切法の眞如即ち宇宙の眞相は本來不生不滅なればなり

別して止を説く

眞如一行三昧

亦既に法性眞如に順すれば心外無境なるを以て、心外に先づ實境を認め、其の實境を認むる心は妄なりと除遣する如き迂愚の法は不可なり、又若し止を修する間に心散亂せば心外無境の正念に住すべし、心外無境なれば此の心亦自相なく空寂にして念々不可得なり、之れ端座に於て修するのみならず、去來進止起居動作如何なる時に於ても、常に法性不動の理に順じて觀察修行すべきなり、然り而して久習し淳熟せんか、眞如三昧に入て一切の境相皆止み初住不退位を成すべし、唯疑惑不信等のものは入ること能はず。

復次依是二昧故則知法界一相。謂一切諸佛法身。與衆生身平等無二。即名二行三昧。當知眞如是三昧根本。若人修行漸漸能生無量三昧。

**和譯** 復た次に是の三昧に依るが故に則ち法界一相なりと知る、謂く一切諸佛の法身と衆生身と平等無二なる即ち一行三昧と名く、當に知るべし眞如は是れ三昧の本なることを、若し人修行すれば漸々に能く無量の三昧を生ず。

**要義** 眞如三昧の異名と勝徳を陳ぶ。

眞如三昧に入る時は法界一相にして差別なく、佛凡平等無二なり、依て之を一行三昧とも名く、此の眞如一行三昧は諸三昧の根本なれば、若し能く之を修せんか無量三昧を生ずべし。

或有衆生無善根力。則爲諸魔外道鬼神之所惑亂。若於坐中現形恐怖。



或現<sub>ハ</sub>端正男女等相<sub>ヲ</sub>當<sub>レ</sub>念<sub>ス</sub>唯心境界則滅終不爲<sub>レ</sub>惱  
 或現<sub>ハ</sub>天像菩薩像亦作<sub>レ</sub>如來像相好具足或說<sub>ハ</sub>陀羅尼若說<sub>ハ</sub>布施持戒忍辱  
 精進禪定智慧或說<sub>ハ</sub>平等空無相無願無怨無親無因無果畢竟空寂是真  
 涅槃或令人知<sub>レ</sub>宿命過去之事亦知<sub>レ</sub>未來之事得<sub>レ</sub>他心智辯才無礙能令<sub>レ</sub>  
 衆生貪<sub>ス</sub>著世間名利之事又令<sub>レ</sub>使人數瞋數喜性無常準或多慈愛多睡多  
 宿多病其心懈怠或率起<sub>レ</sub>精進後便休廢生於不信多疑多慮或捨<sub>レ</sub>本勝行  
 更修<sub>レ</sub>雜業若著<sub>レ</sub>世事種種牽纏亦能使人得<sub>レ</sub>諸三昧少分相似皆是外道  
 所得非<sub>レ</sub>眞三昧  
 或復令人若一日若二日若三日乃至七日住於定中得<sub>レ</sub>自然香美飲食身  
 心適悅不飢不渴使人愛着或令人食無分齊乍多乍少顔色變異以是  
 義故行者常應智慧觀察勿令此心墮於邪網當勤正念不取不着則能遠  
 離是諸業障  
 應知外道所有三昧皆不離見愛我慢之心貪着世間名利恭敬故眞如三

昧者不住見相不住得相乃至出定亦無<sub>レ</sub>懈怠所有煩惱漸微薄若諸  
 凡夫不習此三昧法得<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>如來種性無有是處以修<sub>レ</sub>世間諸禪三昧多  
 起<sub>レ</sub>味着依<sub>レ</sub>我見繫屬<sub>レ</sub>三界與<sub>レ</sub>外道共若離<sub>レ</sub>善知識所護則起<sub>レ</sub>外道見故

和譯

或は衆生あり善根の力無く、則ち諸魔外道鬼神の爲めに惑亂せらる、若しは坐中に於いて形を現はして恐  
 怖せしめ、後は端正なる男女等の相を現はす、當に唯心を念すべし、境界則ち滅して終に惱みを爲さず。

或は天像菩薩像を現し、亦は如來の像を作して相好具足し、或ひは陀羅尼を説き若しくは布施持戒忍辱精進禪定智慧  
 を説き或は平等空無相無願無怨無親無因無果畢竟空寂なる是れ眞の涅槃なりと説き、或は人をして宿命過去の事を知  
 り亦は未來の事を知り、他心智、辯才無礙を得せしめ、能く衆生をして世間名利の事に貪著せしむ、又は人をして數  
 々瞋り數々喜て性常準無く、或は多慈愛多睡多宿多病にして其心懈怠ならしめ、或は卒に精進を起して後便ち休廢し  
 不信を生じて多疑多慮ならしむ、或は本の勝行を捨て、更に雜行を修し、若しは世事に着して種々に牽纏せらる、亦  
 能く人をして諸三昧の少分相似を得せしむ、皆是れ外道の所得にして眞の三昧に非ず。

或は復人をして若しは一日若しは二日若しは三日、乃至七日定中に住して自然香美なる飲食を得て身心適悅し不飢不  
 渴ならしめ、人をして愛着せしむ、或は人をして食に分齊なく乍ちに多く乍ちに少くして顔色變異ならしむ、是の義  
 を以ての故に行者常に應に智慧觀察し、此心をして邪網に墮せしむるべし、當に勤めて正念にして不取不着  
 ならば、則ち能く是の諸業障を遠離すべし。

應に知るべし外道所有の三昧は皆見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬に貪着するが故なり眞如三昧は見相に住せ



ず得相に住せず、乃至定を出つるも亦解慢無し、所有の煩惱漸々に微薄なり若し諸の凡夫此三昧の法を習はずして如來の種性に入ることを得ることを得ると云はゞ是の處り有ること無し、世間の諸禪三昧を修すれば多く味着を起す、我見に依て三界に繫屬し外道と共するを以てなり、若し善知識の所護を離れば則ち外道の見を起すが故に。

**要義** 止を修するに就て魔障あるを擧げ、對治の方法を説き、外道三昧を分別し、眞如一行三昧の眞相を陳ぶ。

魔障の相

魔障には種々あり、即ち恐怖の相貌を現じ、男女端麗の相を現じ、佛菩薩の相を現じて六度等の法を説き、宿命通天眼通等有漏の五通を得せしめて惑はし、煩惱を起さしめて心を錯亂し、外道の三昧を與へて禪悅食に惑溺せしめ、食欲を紊して衰弱せしむる等枚擧に違あらず、次に之を對治する方法は、行者常に智慧觀察して、正念に住し不取不着なれば、魔障自然に退散すべし、次に外道の三昧とは内は見愛我慢の心を離れず、外は名聞利譽に貪着するを以て毫も煩惱を退治すること能はず、後に眞如一行三昧の眞相とは能縁の心を亡するを以て見相に住せず、所縁の境を亡するを以て得相に住せず、能所主客を泯亡するを以て漸々に煩惱を斷じ、如來種性の初住不退位に入る、然るに四禪四無色等の世間禪は我執を離るること能はず外道の三昧に簡ぶなし。

外道三昧の相  
眞如三昧の眞相

復次精勤專心修學此三昧者現世當得十種利益云何爲十。

一者常爲十方諸佛菩薩之所護念。二者不爲諸魔惡鬼之所恐怖。三者不爲九十五種外道鬼神之所惑亂。四者遠離誹謗甚深之法。重罪業障漸漸微薄。五者滅一切疑惑諸惡覺觀。六者於諸如來境界信得增長。七者遠離憂悔於生死中勇猛不怯。八者其心柔和捨於憍慢。不爲他人所惱。九者雖未得定於一切時一切境界處則能減損煩惱不樂世間。十者若得三昧不爲外緣一切音聲之所驚動。

和譯

復次に精勤して專心に此の三昧を修學する者は、現世に當に十種の利益を得べし云何が十と爲す。

一には常に十方諸佛菩薩の爲めに護念せらる、二には諸魔惡鬼の爲めに恐怖せられぬ、三には九十五種外道鬼神の爲めに惑亂せられず、四には甚深の法を誹謗することを遠離し、重罪業障漸々に微薄なり、五には一切の疑惑諸の惡の覺觀を滅す、六には諸如來の境界に於いて信增長することを得る、七には憂悔を遠離し生死の中に於いて勇猛不怯なり、八には其の心柔和にして憍慢を捨て他人の爲めに惱まされず、九には未だ得定せず雖も一切時と一切境界處に於いて則ち能く煩惱を減損して世間を樂ばず、十には若し三昧を得れば外縁一切音聲の爲めに驚動せられず。

**要義** 止を修すれば現世に十種の利益あるを陳ぶ。

止を修すれば後生に利益あるのみならず、現世に十種の利益あり、一に佛菩薩護念の益、二に諸魔畏怖の益、三に外道遠離の益、四に重障微薄の益、五に疑惑滅除の益、六に信

止十種の益



仰增長の益、七に勇猛不怯の益、八に心身柔和の益、九に世間不樂の益、十に外縁不動の益是れなり。

復次若人唯修於止則心沈沒或起懈怠不樂衆善遠離大悲是故修觀。

和譯 復た次に若し人唯だ止のみを修すれば則ち心沈沒し、或は懈怠を起して衆善を樂はず大悲を遠離す是故に觀を修すべし。

別して觀を説く

要義 前に止を明し了る、次に別して觀を明す中、先づ觀を略説す。

唯だ止のみを修せんか止水湛然として心沈沒し、活動を缺くを以て衆善を樂はず度生の大悲を缺き自利他共に失ふ、是に於て活動的の觀を修すべきなり。

修習觀者當觀一切世間有爲之法無得久停須臾變壞一切心行念念生滅以是故苦應觀過去所念諸法恍忽如夢應觀現在所念諸法猶如電光應觀未來所念諸法猶如於雲歎爾而起應觀世間一切有身悉皆不淨種種穢汚無一可樂。

和譯 觀を修習する者は當に一切世間有爲の法は久しく停まることを得ること無く須臾に變壞す、一切の心行は念々に生滅す、是を以ての故に苦なりと觀すべし、應に過去所念の諸法は恍忽として夢の如しと觀すべし、應に現在所念の諸法は猶電光の如しと觀すべし、應に未來所念の諸法は猶雲の歎爾として起るが如しと觀すべし、應に世間一

一、法相觀

切の有身は悉く皆不淨にして種々の穢汚なれば一も樂むべき無しと觀すべし。

要義 次に觀を修するに、法相觀、大悲觀、大願觀、精進觀の四階級あり、今は初の法相觀なり。

法相觀は前の自利を失ふ過を治するものにして、四非常觀なり、一に無常觀、二に苦觀、三に無我觀、四に不淨觀是れなり。

如是當念一切衆生從無始時來皆因無明所熏習故令心生滅已受一切身心大苦。現在即有無量逼迫。未來所苦亦無分齊難捨難離而不覺知衆生如是甚爲可愍。

和譯 是くの如く當に念すべし、一切衆生は無始の時より來た昔無明に熏習せらるゝに因るが故に心をして生滅せしむ、已に一切身心の大苦を受け、現在に即ち無量の逼迫あり、未來の所念も亦分齊無し、捨て難く離れ難くして而も覺知せざるなり、衆生是くの如し甚だ愍む可しと爲す。

要義 大悲觀を陳ぶ。

一切衆生は無始以來、無明の爲めに熏習せられ、生死の苦報を受け、現在にも未來にも無量の苦痛を蒙る、然も之を解脱するの道を知らざるなり、甚だ愍むべきものなりと觀す。

二、大悲觀



作是思惟、即應勇猛立大誓願、願令我心離分別故。徧於十方修行一切諸善功德、盡其未來、以無量方便救拔一切苦惱衆生、令得涅槃第一義樂。

**和譯** 是の思惟を作して即ち應に勇猛に大誓願を立つべし、願くは我心をして分別を離れ令むるが故に、十方に徧うして一切の諸善功德を修行し、其の未來を盡し、無量の方便を以て一切苦惱の衆生を救拔し、涅槃第一義の樂を得せしむ。

**要義** 大願觀を陳ぶ。

斯の如き苦惱の衆生を救濟し涅槃を得せしめんが爲め大誓願を立つるを云ふ。

以起如是願故。於一切時一切處。所有衆善隨已堪能不捨修學心無懈怠。唯除坐時專念於止若餘一切悉當觀察應作不應作。

**和譯** 是くの如きの願を起すを以ての故に一切時一切處に於いて、所有の衆善これが堪能に隨つて修學を捨てず心に懈怠なし、唯だ坐する時、止を專念するを除く、若し餘の一切にも悉く當に應作と不應作とを觀察すべし。

**要義** 精進觀を陳ぶ。

度生の大願を立てたる以上は、端座して止を專念する外、常に畢生の努力を拂ひて修善奉行し、應作とて真如に順して作すべきこと、不應作とて真如に違して作すべからざることを觀察すべし。

三、大願觀

四、精進觀

ることを觀察すべし。

若行若住若坐若臥若起。皆應止觀俱行。

所謂雖念諸法自性不生。而復即念因緣和合善惡之業苦樂等報不失不壞。雖念因緣善惡業報而亦即念性不可得。若修止者對治凡夫住着世間能捨二乘法弱之見。若修觀者對治二乘不起大悲狹劣心過遠離凡夫不修善根。

以是義故是止觀二門共相助成不相捨離。若止觀不具則無能入菩提之道。

**和譯** 若しは行、若しは住、若しは坐、若しは臥、若しは起、皆應に止觀俱行すべし。

謂ゆる諸法の自性は不生なりと念すも雖も而も復た即ち因緣和合する善惡の業苦樂等の報は不失不壞なりと念す、因緣善惡の業報を念すも亦即ち性不可得なりと念す、若し止を修する者は凡夫の世間に住着するを對治して能く二乘法弱の見を捨す、觀を修する者は二乘の大悲を起さざる狹劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざることを遠離す。

是の義を以ての故に是の止觀の二門は共に相助成して相捨離せず、若し止觀具せざれば則ち能く菩薩の道に入ることを無し。



**要義** 既に止と觀とを別釋し了る、後に止觀雙運を陳ぶ。  
 行住座臥皆悉く止觀を俱行すべし、即ち一切諸法の自性は不生不滅(止)なると同時に因縁和合する善惡の業報は不失不壞(觀)なり、又因縁和合する善惡の業報は不失不壞(觀)なると同時に一切諸法の自性は不生不滅(止)なり、止に即するの觀、觀に即するの止、平等即差別、差別即平等、止觀不二、眞生不二なるを以て、能く凡夫二乗の心過を退治し佛果菩提の道に入ることを得べし。

復次衆生初學是法欲求正信其心怯弱以住於娑婆世界自畏不能常  
 值諸佛親承供養懼謂信心難可成就意欲退者○當知如來有勝方便  
 攝護信心謂以專意念佛因縁隨願得生他方佛土常見於佛永離惡道  
 ○如修多羅說若人專念西方極樂世界阿彌陀佛所修善根迴向願求生  
 彼世界即得往生○常見佛故終無有退若觀彼佛眞如法身常勤修習  
 畢竟得生住正定故

**和譯** 復次に衆生初めて是法を學し正信を欲求するに其心怯弱なり、此の娑婆世界に住するを以て自から常に諸佛に値うて親承し供養すること能はざることを畏れ、懼れて信心成就す可きこと難しと謂うて意に退かんと欲する

者は○當に知るべし如來に勝方便ありて信心を攝護す、謂く專意念佛の因縁を以て願に隨つて他方の佛土に生るゝことを得、常に佛を見て永く惡道を離る○修多羅に説くが如し、若し人専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、修する所の善根迴向して彼の世界に生れんと願求することを得○常に佛を見るが故に終に退あること無し、若し彼佛の眞如法身を觀じ常に勤めて修習すれば畢竟して生るゝことを得、正定に住するが故に。

**要義** 防退の方法として、易行念佛の一門を開示す。

夫れ衆生(十信位兼ては)大乘の法を學び四信五行を爲し、正信の初住不退位を得んと欲するも、此の娑婆世界は退縁多くして、現時之を實地に策修すること能はざるを云何せん是に於てか如來に勝方便(本頌力并に念佛三昧十六觀行等)ありて信心を攝護し給ふ、されば專意念佛の因縁を以て、願に隨て他方佛土(諸佛の淨土なれども引經より見れば極意は彌陀の淨土なり)に生じ、永く三惡道を離る、故に經(淨土三部經及)に、若し人専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、所修の善根を迴向して、彼の阿彌陀佛國に生せんと願求すれば、即得往生疑なし、と説き給へり、是を以て往生人は常に彼の國土に於て佛を見奉るがゆへ、終に退轉することなし、若し夫れ更に勝機(三賢十地)のものありて、彌陀の眞如法身即ち理體を觀じ、常に勤修せんか、正定聚(初住已上)に住するを以て、畢竟して往生することを得るなり。

**詳義** 專意念佛は觀念口稱兩通なり、『孔目章』四七丁に淨土論讚嘆門の念佛を口稱の



念佛とし、『禪源詮』上<sup>六</sup>丁は觀念とし、長水等は口稱の念佛なりとせり、然ども眞宗一家の極意より見るときは、正しくは口稱にして兼ては觀念に通すと云ふべき歟、修多羅說の下は念佛あり善根ありて、十八十九二十眞假未分なれども、上の專意念佛の文に對照せんか、極意は十八弘願の念佛となるべし、常見佛等の八字を海東は經說の文と見、若觀以下を馬鳴の釋とす、斯くする時は若觀以下も前と同じく劣機のみ釋となる、然るに『義記』は常見佛等以下を馬鳴の釋と見る、然る時は若觀以下は勝機の釋となり、勝劣二機を顯はすものとなるべし、二說何れも可なりと雖も、佛の理體を觀する邊より見る時は、劣機と勝機を分つ方大に可なり、若觀彼佛の若の一字新譯になし、若の一字なき時は往生して常に佛を見奉り、以て理體を觀するの意にて、劣機のみに約することゝなる、舊譯は若の一字ありて勝機を顯はし、初住以上の勝機も亦復た極樂往生を願求すべしとの意を示す、然も起信論の當分として、勝機は四信五行の法あり、分別發趣道相に説ける三種の發心ありて、極樂往生は傍意に屬すべし、若の一字着眼すべし、是れやがて本意凡夫兼爲聖人の趣旨に、契合すべきものありと云ふべし。

若し本論を觀經に比較せんか、觀經には正宗分に廣く定散二善を説くも、流通文より逆見する時は一經全く念佛を鼓吹するものなりと、解釋するの例に倣んか、本論も之と同

じく一心二門三大四信五行を説くも、此の文より逆見する時は一論全く念佛を鼓吹するものなりと、解釋するを得べし、然れども虚心平氣に今の文を見る時は眞假未分にして旗幟鮮明ならざるものあり、元祖法然聖人『選擇集』に傍明往生淨土論と判せられしもの寔に所以ありと云ふべし。

### 第九章 勸修利益分

本論に五分ある中、今は第五の勸修利益分にして、上來の説を信じて行ふ時は、其の利益たるや廣大無限なり、過去一切の諸佛も此の法に乗じて無上涅槃を得、現在未來一切の諸菩薩も此の法に乗じて成佛することを得、是の故に一切衆生亦復た此の法に乗ずべしと、利益を擧げて勸修するにあり。

本論は卷頭の歸敬頌を序分とし、卷末の流通頌を流通分とし、中の五分を正宗分とす若し五分の正宗分中に於て序正流通を求むれば、因緣分は序分にして、立義分解釋分修行信心分は正宗分、今の勸修利益分は流通分に當る。

已說修行信心分、次說勸修利益分。如是摩訶衍諸佛秘藏、我已總說。若有衆生欲於如來甚深境界得生正信、遠離誹謗、入大乘道、當持此論思

本論の分科



量修習究竟能至無上之道。

和譯 已に修行信心分を説く、次に勸修利益分を説かん是くの如きの摩訶衍は諸佛の秘藏なり我れ已に總説す、若し衆生あり如來甚深の境界に於いて正信を生ずることを得、誹謗を遠離して、大乘道に入らんと欲せば當に此論を

利益を總説す

持して思量し修習すべし、究竟して能く無上の道に至らん。

要義 前段を結びて後を起し、次に此の論信受の利益を説く中、今は先づ其の利益を總説す。

上來説き來りし大乘の法は諸佛の秘藏寶輪なり、若し衆生ありて此の法を信じ、大乘菩薩所修の道(即ち因道の義にて佛果に)に入らんと欲せば、須らく此の論を持し(聞)、思量し(思)、修習すべし(修)、究竟して佛果涅槃の無上道(即ち果道の義なり)に至らん。

若人聞是法已不生怯弱。當知此人定紹佛種必爲諸佛所授記。假使有人能化三千大千世界滿中衆生令行十善不如有人於一食頃正思此法過前功德不可爲喻。

復次若人受持此論觀察修行若一日一夜所有功德無量無邊不可得説。

假令十方一切諸佛各於無量無邊阿僧祇劫歎其功德亦不能盡何以故謂法性功德無有盡故此人功德亦復如是無有邊際。

和譯

若し人は法を聞き已つて怯弱を生ぜざれば、當に知るべし此人定て佛種を紹ぎ必ず諸佛の爲めに授記せられん、假使人あり能く三千大千世界の中に滿てる衆生を化して十善を行はしめんよりも如かず、人あり一食の頃に於いて正しく此法を思はん前に前の功德に過ること喻を爲す可からず。

復た次に若し人此論を受持して觀察修行すること、若しは一日一夜せんに所有の功德は無量無邊にして説くことを得べからず、假令十方一切の諸佛各々無量無邊阿僧祇劫に於いて其の功德を歎すとも亦盡すこと能はず、何を以ての故ぞ謂く法性の功德盡ること有ること無きが故に、此人の功德も亦復是くの如く邊際有ること無し。

要義 次に聞思修の三慧に約して、其利益を別説す。

若人聞是法以下は聞慧の益相を明し、假使有人以下は思慧の益相を明し、復次若人以下は修慧の益相を陳ぶ、中に於て授記とは當來必ず成佛する記別即ち保證を授け與へらるゝを云ふ。

其有衆生於此論中毀謗不信所獲罪報經無量劫受大苦惱是故衆生但應仰信不應毀謗以深自害亦害他人斷絕一切三寶之種以一切如來皆依此法得涅槃故一切菩薩因之修行得入佛智故。

和譯

其れ衆生あり此論中に於いて毀謗して信ぜざれば獲る所の罪報は無量劫を経て大苦惱を受く、是故に衆生但だ應に仰信すべし毀謗すべからず、深く自から害し亦他人を害して一切三寶の種を斷絶するを以て、一切の如來は

三慧に約して利益を別説す



皆此法に依て涅槃を得べきが故に、一切の菩薩は之れに因て修行して佛智に入ることを得るを以ての故に。  
要義 次に此の論を誹謗する罪の重きことを陳ぶ。

此の論を誹謗せんか、無量劫の間大苦惱を受くべし、何となれば自を害し他を害し自損損他以て三寶の種を斷するがゆへなり、三寶の種を斷すとは、一切の如來も菩薩も皆此の法に乗じて菩提涅槃に至るを以てなり。

當知過去菩薩已依此法得成淨信現在菩薩今依此法得成淨信未來菩薩當依此法得成淨信是故衆生應勤修學。

和譯 當に知るべし過去の菩薩も已に此法に依て淨信を成ずることを得、現在の菩薩も今此法に依て淨信を成ずることを得、未來の菩薩も當に此法に依て淨信を成ずることを得べし、是故に衆生應に勤めて修學すべし。

要義 後に結勸す。

三世の菩薩同じく此の法を行じて更に異路あることなし、故に應に勤めて修學すべし。

### 第十章 流通頌

諸佛甚深廣大義 我今隨順總持說  
廻此功德如法性 普利一切衆生界

和譯 諸佛甚深廣大の義、我今隨順し總持して説く、此の功德の法性の如くなるを廻して、普く一切衆生を利せん。

要義 卷頭に掲ぐる歸敬頌の序分に對して、今の四句一頌は流通分なり。

諸佛の證れる甚深廣大なる大乘の法義を、我れ馬鳴此の法に隨順し總括して説く、此の造論の功德の法性眞如の如く廣大無邊なるを廻して、普く遐代一切衆生界を利益せんことを願求す。

本論は偈頌を以て始まり、偈頌を以て終る、如何に馬鳴菩薩が敬虔の信念を以て端を起し、如何に雄大なる抱負を以て局を結びしかを想見するに足るものあり、然るに此の流通頌たるや僅に四句一頌なるを以て、拜誦の際輕々に看過し去る嫌なき能はず、依て特に一章を設け、大士の抱負を讃仰し、度生の切なるを欽仰す。

### 第十一章 餘論

#### 一 眞如緣起の三大難

發端 眞如緣起と云ふは本體たる眞如が無明の緣によりて起動し阿黎耶識となり、此れより宇宙の萬有を顯現するものなりと説くにあり、然るに此の説明に就て、疑問の存



するは、眞如と無明の關係如何、無明の起原如何、無明の終局如何にして、古來起信論を講布するもの、盛に此等を討究し、三大難の名稱を以て迎へらるゝに至れり、即ち一に眞妄別體の難、二に眞前妄後の難、三に悟後却迷の難是れなり。

然るに此の問題たるや、後世に至り始めて起りしものに非ず、遠く佛在世に其の端を發せり、即ち『圓覺經』第四金剛藏章に、金剛藏菩薩合掌恭敬し世尊に向ひ奉り、問を發して云く、(一)衆生本來成佛ならば何が故に復た一切無明ありや(眞前妄後に當る)(二)若し諸の無明衆生の本有ならば、何の因縁あるがゆへ如來は復た衆生を本來成佛と説くや(眞妄別體に當る)(三)十方衆生本來成佛し然も後に無明を起すとならば、一切如來は何時か復た一切煩惱を生せん(悟後却迷に當る)と懇請せり、之に對して如來は譬喩を擧げ諄々として説法し給ふ、其の要に云く、生死輪廻の相對分別心を以て、眞如圓覺の絶對を知るべきに非ず、之れ實に證知無分別の境界なりと諭示し、終りに偈を説きて修行の忽緒に附すべからざるを陳べたまふ問の理論的哲學的なるに反し、答は倫理的宗教的にして、寛容不迫の態度渴仰するにあまりあり、問者の心服本より其處なり、然れども是れ世尊にして始めて能く爲し能ふ所のみ。

史實 支那唐朝則天武后時、復禮法師(賢首大師と共に實叉難陀の華嚴經翻譯を助けし高德)偈を造りて、之を天下の

學士に問ふ、謂ゆる眞妄偈と名くるものは是れなり、偈に云く。

眞法性本淨 妄念何由起 從眞有妄生 此妄安可止 無始即無末  
有終應有始 無始而有終 長懷懼此理 願爲開玄妙 析之出生死

此の偈要するに三大難を含蓄す、之に對して、安國寺利涉、章敬寺懷暉、安國寺洪滔、雲華寺海法師等競ふて各々答偈を造る、然れども如果子、清涼澄觀、圭峰宗密三師の答辯大に見るべきものあるに如かざるなり、秦禪法師が四明知禮に向て發せられし疑問亦此の外に出でず。

眞妄偈の眞法性本淨 妄念何由起の間に對しては眞に迷ふがゆへ無明生すと云ふべく、然も眞如先きに在て無明後に起るに非ず、眞如の無始なる如く無明も亦無始なり又既に無明は眞如に迷ふて起る一種の幻想なれば無體即空にして、眞如の外に別體あるに非ざるなり、從眞有妄生 此妄安可止の間に對しては無明は眞如より生ずるものに非ず、眞如に迷ふて生ぜしものゆへ、眞如を悟れば無明は自ら止むべし、眞如は所迷なり、無明は能迷なり、能迷と所迷全同に非ざれば眞如は除くべからざるも無明は除くべきなり、無始即無末 有終應有始 無始而有終と無明を無始とせば無終ならざるべからずとの間に對しては、無明を無始と云ふは從來未だ曾て悟らざりしが故に



無始と云ふも、無明は無體即空なりと知れば無明全く終盡して、唯一眞如の理存するのみと云ふべきなり、眞妄偈に關する史實并に其の解答如何を知らんとせば、『佛祖統紀』第十一卷、『圓覺經略疏鈔』第七卷、『宗鏡錄』第五卷、『十不二門詳解』下末、『林間錄』卷上等を繙き見るべし。

**眞妄別體の難**

眞如は無始の存在なり、無明も眞如と同じく無始の存在なりと云ふ、然らば眞如の外に無明存在し、眞妄全く別體にして起信論は眞妄二元論なるべしとの批難は常に眞如緣起論に向て放たる、強弩なれども、決して然らず、先づ眞如門に就て見るに、『論文』に眞如門を説明して、「心眞如とは一法界の大總相にして法門の體なり」と云ひ、『義記』には「眞如門は是れ染淨の通相なるを以て通相の外に別の染淨なし」と云ひ或は非染非淨と云ひ、或は非眞非妄と云ひ、或は不守自性と云ひ、無住と云ひ、無相と云ひ、約體絶相と云ひ、萬法の通相なりと説けり、されば眞如は染淨未分唯一絶對の本體にして、眞もなく妄もなく眞妄同異の論を超絶せり、豈に眞妄別體にして眞と妄との二元論なりとの説を容る、餘地毫も存せざるや明なり、次に生滅門に就て見るに、眞如と無明は非一非異の關係を有し、非一の方面に於ては、眞如を覺とし無明を不覺とし、覺と不覺、明と不明、眞實と僞妄、互に相差別し、宛も別體にして二元の如くなるも、

斯く眞妄差別するは説明上の假定に過ぎざるなり、是を以て非異の方面に就んか無明は無始の存在なるも、常に恒に眞如に依て存在し、決して自立自存的のものに非ず、若し夫れ眞如の自立自存する如く無明も自立自存なりとせば、別體二元論なりと雖も、起信論に於ては無明は飽迄眞如に依て存在すと主張するものなれば、生滅門に就くも二元論ならざるや明なり、後に無明の性質に就て見るに、『義記』に無體即空と有用成事の二義を出せり、此の二義能く無明の性質を説明するものと云ふべし、即ち無明は無體即空にして理無のものなり、詳言すれば眞實理の上よりせば、無明は元來虛妄の法にして別に實體あるものに非ず、妄法無體は眞如緣起上動すべからざる眞實義なり、然れども吾人迷者より見れば有用成事にして情有のものなり、詳言すれば迷情の上よりせば、迷界差別の現象森然として存在し、山川草木禽獸蟲魚吾人の前に開展せり、斯く迷情の上に萬有の開發せしを有用成事と云ふ、是を以て無明は元來無體即空なりと雖も、迷界の吾人取て以て有用成事となし、宛も無明に一種の作用存する如く妄認するのみ、是れ世尊が金剛藏菩薩に對し、眞妄關係論を提示するは抑々末なり、生死輪廻の迷心を脱却せよと諭されたる所以にして、世尊の解答は實に徹底的の言明なることを知るに足る、斯く妄法無體を主張するを以て、性質に就くも二元論ならざるや明なりとす、眞妄の關係を



説明するに眞如を水に無明を風に喩へ、眞如の水が無明の風に動され、千浪萬波を捲き起すと云ふに就て、水と風全く別體なり、之に比校して眞如と無明も亦全く別體なるべしとの俗難は、喩ば一分にして全分に非ざることを閉却するが致す所なり。

**眞前妄後の難** 眞如に依て無明ありとせば、眞如は前にして無明は後なるべしとの疑を生ず、之れ則ち眞前妄後の難と云はるゝものなり、今之を説明するに當り、如何なる點を解説せば可なるかと云ふに、無明無始の存在と眞妄同時の存在とを以てせば、其の疑問を氷釋し得べし、即ち眞妄共に無始にして然も同時の存在とせんか、眞如は前にして無明は後なりとの疑生ずるに由なければなり、先づ無明無始の存在とは眞如緣起論に於ける根本主義にして、『論文』に「一切衆生を名けて覺と爲さず、本よりこのかた念々相續し、未だ曾て念を離れざるを以て、無始の無明と説く」と云ひ、又「是の心本よりこのかた自性清淨にして無明あり」と云ひ、又「如來藏に前際なきがゆへ、無明の相亦始めあることなし」と云へり、之れ實に無明無始の義を表白するものなり、然るに論者は緣起と云ひ生起と云ふ上は時間的説明なり、されば過去數千萬年の太古原始の時代に遡りて思索すれば、眞如は前に存じ無明は後に生起せりと考ふる外他に道なしとするもの、如し、此の認見は佛教緣起論の立場を明確に領解し徹底せざるに依る、蓋し佛教緣

起論は世に謂ゆる進化論的筆法を用ゆるものに非ず、緣起論の説明は時間的なるも常に實相論の空間的説明を離れたるものに非ず、緣起即實相、豎即横にして、宇宙の實相を捕へ來りて、之れに緣起的時間的説明を與ふるにあり、過去に遡るも現在に就くも、眞妄共に常に無始なるものなり、されば『義記』に「眞に依て妄ありと聞き、便ち眞は先にして妄は後なりと謂ふ、故に無明有始の見を起す。外道(論數)の冥初より覺等を生ずるが如し」と説破せられたり、彼の數論學派に於ては、神我諦の用きによりて、自性冥諦起動して大となり我執となり覺樂等の諸現象を開展すと説くを以て、神我と自性の二は前にして覺樂等は後なりと云ふべし、則ち佛教緣起論に於て眞妄に前後なしとする定説に反するや明なり、斯く緣起の意義を領せんか、『論文』に「忽然として念起るを名けて無明と爲す」と、宛も無明が後より生起する如く思はしむるも、普妄法無體にして根據なきを表明するに過ぎざることを知るに足るべし、次に眞妄同時の存在とは眞如緣起が實相を根底とすることを的確に表白し、眞前妄後の誤解を氷釋するに足るものあり、然して此の眞妄同時の存在なることを遺憾なく説明せんとは、眞如と無明と黎耶の關係を討究せざるべからず、乃ち此の三法の關係に就ては、既に生滅因緣の義(三六)を説く下に梗概を擧げし如く、眞如は本體にして不起の點を論じ、眞如の依て起る原因を説くべきに



非ず、故に『義記』に眞如を説明して「自性動に非ず、但だ隨他動なり」と云へるもの、眞如が宇宙の本體なることを能く説破すと云ふべし、之に反して無明と黎耶とは現象にして起動の點を論ずるものなり、即ち無明に就ては『論文』に「覺に依るが故に迷ふ」、(眞如に依て無明起ること)と云ひ、「阿黎耶識に依るを以て無明あり」(黎耶に依て無明起ること)と云ひ、又阿黎耶識に就ては『論文』に「如來藏に依るが故に生滅心あり」(眞如に依て黎耶起ること)と云ひ、『義記』に「不覺に依るが故に三種の相を生ず」(無明に依て黎耶起ること)と云へり、之を見るに眞如は本體なれば如何なる場合にも不起にして、無明と黎耶は起動の點を説くものとす、而して此の無明黎耶の二者實に互爲同時の因果關係を有するを看取し得べし、此の關係を一層簡短明瞭に説けるもの、謂ゆる『義記』の「(黎耶)に依りて迷(無明)を起し、迷(無明)に依りて(黎耶)を起す、此の二義一時なり、説くに前後あるのみ」と云へるもの文是れなり、即ち此の二義の場合に於て、無明と黎耶は互に因となり果となり眞如は常に縁となるものにして三法同時の存在なることを知るべし、此の點は法相宗に於て三法展轉因果同時説に多少相似たるものあるを以て、比按して眞妄同時の存在なることを知り、眞前妄後の謬見を脱却すべし、彼の無明は眞如に依て存す然らば眞如も無明に依て存すと云ふべし、若し斯く云ふを得ずとせば、眞前妄後の疑は排するに由なかるべしと、論難する如きは、上

來說明せし所の眞如は本體不起門にして無明は現象起動門なることを、充分會得せざる近眼者流の妄難なりと謂ふべし。

**悟後却迷の難** 悟後却迷の難とは一度び眞如を修顯して成佛するも亦迷ふて衆生となるべしとの意にして、或は還作衆生の難とも名く、先づ其の難意を擧ぐれば、眞如が無明の爲めに起動して衆生妄法を生ずと云ふ、然らば一度び眞如を修顯して成佛するも、又還た無明の爲めに起動して衆生妄法を生ずべしと云ふにあり、然るに此の難たるや未だ眞如縁起の根本義を深く領解せざるが致す所なり、抑々眞如縁起は如來藏縁起とも云はれ、在纏有垢の眞如を根底とするものなり、彼の「眞如の都より迷ひ出で」と云ふ如きも、眞如の自性清淨を都と云ふまでにして、決して出纏無垢の眞如を指すものに非ず、是を以て「眞如が無明の爲めに起動して衆生妄法を生ず」と云ふは、在纏有垢の眞如の場合にして謂ゆる眞如縁起の通談なり、次に「一度び眞如を修顯して成佛する」と云ふは、出纏無垢眞如の場合にして佛陀如來の更に迷ふべき理あるなし、何となれば眞如は無始無終なり、如來は眞如に隨順し修顯し相應せしものなれば無終なるや本より其の處なり、無終なるもの何ぞ再び迷ひ出づることあらん、次の難意を擧ぐれば、眞如を無始無終と云ひ無明を有終と云ふ、然るに眞如に例すれば無明は有始と云はざるべか



らず、有始なりとせば始めあるを以て、再び迷ひ出づること否定すべからずと云ふにあり、然るに論者の云ふ如き無終のものは無始なり、從て有終のものは有始なりと速斷するは非論理的妄斷の甚だしきものと云ふべし、之に就て宗密禪師は二種の四句分別を設けらる、則ち左の如し。



無明を有始とせば論者の云ふが如く、又迷ひ出づることあるべしと雖も、真前妄後の下に述ぶるが無く無明は無始の存在なりとす、無始なるを以て一度び斷せば生起し再迷することなきなり、何となれば真如の起動するは他動的にして自動的に非ず、即ち無明の縁を待ちて始めて起動するものなり、然るに無明は無始の存在なれば迷の第一原因にして此れ以上に根據となるべきものなし、今此の第一原因たる無明を斷滅して佛果を得、出纏無垢真如に達せんか、最早起動すべき縁なきを以て、再び生死輪廻に迷ひ出づる理あることなし、後に附記すべき一難は、無明を無始とせば真如の如く無明も亦無終と云

ふべし、無明無終ならば成佛の期なかるべしとの義是れなり、謂く、若し夫れ真如絶對(非異門)の邊に就かんか、真妄の區別を見ざるを以て勿論無終なりと云ふべし、否特に妄法として始終を論すべきに非ず、然るに生滅相對(非一門)の邊に就かんか、真妄全く區別し、真如は本體界無明は現象界、真如は眞實無明は虚妄なれば、無體即空の虚妄法は斷滅することを得て無始有終となり此に成佛の義成立すべし矣。

### 二 無明厚薄有無論

**發端** 宇宙人生の本體を論すれば、皆一味平等にして、差別あるべきに非ずと雖も、しかも山となり川となり非情となり有情となり、植物となり動物となり禽獸となり人間となる所以のものは何ぞや、殊に人生に於て、迷あり悟あり凡あり聖ある所以のものは何ぞや。若し夫れ一味平等の本體即ち真如なるものに、本來恒沙の功德力用を有すとせんか、人々皆等しく宗教心を起し、等しく信念増長し、等しく修養して等しく涅槃の都城に突入すべきの理なり。しかも斯くの如くならざる所以のものは抑々何等の理由に因るか。於茲乎無明論なるもの起る、云く、無昧の妄法ありて、一味清淨の眞如法性の本體界に作用し、以て森羅萬象を顯現するに至ること宛も平穩なる同一鹹味の水が、風の



縁によりて狂瀾怒濤を起し、男波女波一起一伏して千態萬様の風光を現出するが如し、斯くして六道に輪廻して生死の巷に彷徨し、真如の都門に到達するもの甚だ尠く、而も前後遲速を生ずるに至るものなり。是を起信論に述べて云く、

真如本一而有無量無邊無明。從本已來自性差別厚薄不同。

と。斯く無明に無量無邊の差別あるを以て、一味平等の真如界に波瀾を起し、千差萬別迷者あり悟者あり善人あり惡人あるに至るものとせんか、尙ほ疑問なき能はざるものは彼の根本の無明にも本來無量無邊の差別あり厚薄あるべきものなりや、元より枝末無明に差別厚薄あることは何人も首肯し得べしと雖も、元初迷真の一念即ち無始の無明に厚薄ありや否やの問題は、輕々に解決し得べからざるものあり、馬鳴の『本より已來自性差別にして、厚薄不同なり』との言を以て、直ちに根本無明に適用し得べきや否やは、これ一個の疑問なりと云はざるべからず、茲に無始根本の無明に就て厚薄の有無を問はんと欲する所以なり。

惠遠

淨影寺の惠遠は、起信論疏下の上十四に於て、之に關する見解を述べて云く、

問曰。若初真一何故起染厚薄不同。答無始無明等同品無有鹿細。知識以後染著不同。同心慮異故。續識以後起成深淺故。果報優劣上下不等利鈍差別。然此義者非三

所能知。

と、惠遠が無始の無明を『等同品にして鹿細あることなし』と云ふは如何なる理由に依りしものなるか、疏の上に於ては分明ならずと雖も、若しそれ大乘義章五本七下二に、

無明迷理闇惑不緣事生。所述之理平等一味故從所述說以爲一。

と云ふもの略ぼ其意を察するに足るべし。即ち無始の無明を等同にして厚薄なしと云ふものは、真如既にこれ一味平等なるが故に、之に對する迷理の惑たる無始の無明の故を以て、いま所述の平等の理に従へて厚薄なしと云ふなり。然らば若し所述の理に従へず單に無始の無明その者に就て厚薄如何を論ずれば、之を如何に答ふるならん、この點より見る時は、惠遠の厚薄なしと云ふもの未だ徹底したる釋義にあらざるべし。

賢首 起信論註釋の大立物たる賢首は、此點につき如何に説明を與ふるや、義記に述べて云く、

根本無明住地本來自性差別隨人厚薄。厚者不信薄者有信。前後亦然。

と、これ明かに根本無明に厚薄ありと立つるものにして、惠遠の説と相反するを知るべし。

上來吾人は何等の注意することなく、根本と無始とを同一なりとの意にて使用し來りし



は、強ち自己の私言に非ずして、既に賢首は義記に根本無明なるものは、瓔珞本業經の無始無明に異なるなく、唯だ始めなきに就て、無始と云ふなりと説き、嘉祥も勝鬘經寶窟中末<sup>五下</sup>に、作念而起名刹那心久來性成非作念起故曰無始無明住地」と云ひ、全く根本と無始とを同一意味に使用せり、これ説明を待たずして何人も知悉することなるべしと雖も、典據を尊ぶ佛教徒の爲めに一言附記し置く而已、

賢首は如斯無始無明の厚薄肯定論者なるを以て、その著起信論別記<sup>下</sup>にも左の如く云へり、

問無明動眞如成染心何故染無明緣約位辨眞心是其因而不論優劣答以下染法有差別眞心唯一味故也。

此に無明と云ひ染法と云ふは、根本か枝末か何れなりや判然せざるが如くなれども、此文の次上に、『細惑更無所依故云忽然起同經中無始無明』と特に記すが故に根本無始に就ての説なること明かなり。賢首が根本無始の無明に本來差別厚薄ありと云ふは、如何なる理由に基くものなりやは、別に説明する所なきが故に直ちに之を洞見することを得ざるも、長水の子璿は筆削記<sup>十四下</sup>に、義記の文を釋して云く、

根本等者既是生滅妄法爾不得平等衆生具此各々不同同眞如一體平等故云厚

薄。

と、この根本等とは既に是れ生滅の妄法なりとの言は、文簡約なりと雖も多少其意向を伺ふに足るものありと信ず、鳳潭の幻虎錄卷五<sup>下</sup>にも、この義記の文を釋すれども、單に子璿の文を其儘取りて自家の釋なるが如くに粧へる邊より見るときは、鳳潭も子璿の説を賢首の正意なりと首肯せしなるべし。

言家と台家 惠遠と賢首、その意見を異にする所ありしと雖も、其以後之に就きて左程注意を拂ひしものあるを見ざりしが、我國に於ては、無始無明の厚薄云何の題目を掲げて、眞言家と天台家とに於て盛に討議せしもの、如し。

言家の典據たる釋摩訶衍論には『無明煩惱厚薄別故如是差別』とあり、而して言家が云何に之を決するやを見るに、最も簡便なるものは釋論啓蒙なるべし、その第七卷の中に、無明厚薄の論目ありて議論を上下せり、乃ち彼には無明煩惱厚薄とあるが故、無明煩惱の句は共に枝末なりや將た無始なりや、或は又、無明は無始にして煩惱は枝末なりやを主として研究し傍ら淨影の無始無明の等同品を會通して、終に無明煩惱の句は無始に局るなりと決せり、之れ即ち無始無明に厚薄を立つるの意なりと云ふべし。

然らば天台家、殊に比叡の山門家に於ては云何と云ふに、これ甲論乙駁容易に決せざる



の勢を以て論究せられしもの、如し。彼の二百題中にも此論目ありて、主として五百品の記並に方便品の疏に就て論戰を試みたるもの、如し。

五百品記云。以下由結縁厚薄不同遂名無明以爲輕重等

方便品疏云。今明根有利鈍二者皆論大乘根性惑有厚薄者約別惑爲言耳等

厚薄ありと主張する論者は云く、元初微細の念と雖も法爾自性の差別何ぞ之なしと云はん、彼の五百品の記は唯だ近く結縁に就くのみにして未だ元初を明示せざるなり、又方便品の疏は、過去熏習の不同は、取りも直さず無始無明法爾自性の差別なることを知るべし、又淨影の如きは唯だ麁細論に就て起信論を釋せしのみ、微細の點までは研究せざるものなりと主張するに在り。

厚薄なしと主張する論者は云く、無始の無明は迷真無初の一念にして行相極めて微細なり、何ぞ厚薄の不同を論すべきや、五百品の記の如きは、唯だ是れ結縁の厚薄に約するのみ、又方便品の疏の如きは過去の熏習に約するのみ、又起信論の文も淨影より見るときは、決して無始の無明を云々するものに非ずして、唯だ是れ智識續識以後に約して説きしものなりと論するに在り、斯くして山門の義としては無始の無明に厚薄なしと決するものとす。

大寶 三井の大寶は、その起信論講義中に山門と言家との兩説並に承用し難しとて自家の意見を述ぶる所あり、其意に云く、『迷真流轉の元始且くその行相は、最極微細に起り更に此れより細なるものなし、是の故に論に、初一念の心は木石無心に異ならずと判するのみ、衆生無量なりと雖も、而も同等一品厚薄の異なることなし故に經論解釋を尋ぬるに、未だ曾て行相の麁細に就き多人相望して、以て無始無明の厚薄を説くを見ず、若し強いて理を立て元初の一念後に望むる時は微細の行相なりと雖も、又法爾として微細の厚薄あるべし、と云は、亦何ぞ法爾として業識を超えて直ちに轉識等起し、或は三細を超えて直ちに事識を起すものなかるべけんや、況や證誠なし、誰か敢て信受せん然るに、其性分を論すれば何ぞ厚薄の不同ならん、故に今の論文に判じて、無量無邊無明從本自性厚薄不同と云ふ。法藏の疏に釋して云く、根本無明住地本來自性差別隨人厚薄と、古來菽麥を辨せず自性差別を解せずして行相の差別と云ふ、嗟呼謬りの何ぞ久しき、淨影の疏に『無始無明同等一品無有麁細。智識續識以後深淺差別』と爲すものは行相厚薄に約す、故に智識續識以後方に麁細を成すと云ふ性分の厚薄を云ふに非ず、以て前義を妨ぐべからず。蓋し論文固より多含なるを以ての故に、法藏の意は自性差別厚薄不同の二句を俱に無始無明の性分の強弱を説くとす、淨影の意は、上の句は智識



以後の利鈍の根性の差別、下の句は行相の麁細と爲す、知るべし、兩疏の意釋義同じからずと雖も其旨別なし、藏師行相の麁細に智識續識已後を遮せず、淨影亦性分の強弱は無始以來なるを遮せず、如是和會して文理俱に成じ解釋塞ぐことなきもの歟」と。

以上全く大寶の意見也、要するに賢首は性分に就て無始の無明に厚薄ありとし、淨影は行相に就て無始無明に厚薄なしと云ふなりと和會折衷を試みしに外ならざるなり。

概評 淨影が無始の無明に厚薄なしと云ふは、所述の理に従へて厚薄なしと云ふ意なることは既に説明せし所也、理は元より平等一味にして差別あるべからず、然るに無始の無明なるものは、此平等一味の理に迷ふより起るものなれば、且らく所述の平等一味の理に従へて無始無明を厚薄なしと云ふものにして、若し理に従へずして、直ちに無始の無明其の者に就て厚薄如何を論せんか、淨影も亦厚薄ありと主張すべきこと、これ論理の法則上是非とも然らざるべからざることなり、唯だ一面所述の理に就て論せし迄に止めしかば、此に後來の物議を醸すに至りしものと云ふべく、此點淨影の説明未だ徹底せざりしを遺憾とす。

然るに三井大寶の如き猶ほこの邊の消息を詳かにせず、淨影の無始無明厚薄なしと云ふは、行相の微細に約して説くものなりと主張せり、之れ全く淨影の起信論疏を見るのみ

にして、未だ大乘義章に云ふところの所述の理に従へて一と爲すとの説明を詳かにせざるの失ありと云ふべき歟。若し夫れ此の説明を見れば明かに一面に於ては無始の無明に厚薄ありとの意なることを首肯すべし、何ぞ行相微細の救説を爲すを要せん。加之、行相微細の故に厚薄なしと云ふは、一往の説にして終極すれば、焉ぞ厚薄なしと云ふべからざるに於てをや。

無始なる語は始めなしと云ふことなれば、其の言下に既に緣起を意味すべし、緣起を無視して未だ無始を談すべからざるなり、故に長水の疏に根本とは是れ生滅の妄法なり、法爾として平等を得ずと説けるもの、緣起の立場より根本即ち無始を説明せしこと論ずるまでもなきこと、云ふべし、斯く無始なるもの緣起の語なりとせば、無始と雖も厚薄なかるべからず、若し根本無始に厚薄なしとせば、何ぞ差別の緣起を見ることを得ん、賢首家が無始の無明に厚薄ありと説くもの誠に所以ありと云ふべきなり。

翻て台家の所論を見るに、厚薄ありとするものは、法爾自性の差別之なしと云ふべからずと主張し、厚薄なしとするものは、行相微細なれば厚薄を論すべきに非すと主張す。されば三井の大寶の如きは、之を賢首と淨影とに於て立論せし迄なることを知るべく、強ち新發揮の説明にも非るべし。今台家に於て論ずる所の兩説中、行相微細なれば厚薄



を論ずべからずと云ふものは、上にも述べし如く徹底せる説明には非ざるべく、法爾として自性は差別あれば厚薄ありと云ふものは、固より實相論の立場としても斯く主張すべきこと至當なりと信す。然るに山門に於て無始の無明に厚薄なしと結論する所以のもの豈行相微細なれば厚薄を論ずべからずと云ふが如き淺薄なる意味ならんや、竊に思ふ台家の如き實相立ちの法門に於ては、元來自性の差別を論ずべきものなるに、無始無明を談じて厚薄なしと云ふもの、彼の所謂性善性惡説まで溯りて厚薄なしと云ふものには非るなきか、果して然りとせば性善性惡なる者は、簡明に表白せば、善となり惡となるべき可能性の意なるべき筈なれば、華嚴家の自性清淨無自性〇と異なる所なかるべし、華嚴家は自性無自性の外に無明の妄法を説くが故に清淨と云ひ、台家は之を外に見ざるが故に單に清淨と云はずして性善性惡と云ふのみ。されば性善性惡は即ち無自性にして、實は平等一味のものなれば、決して厚薄を論ずべき筈のものに非るべし。而して台家の厚薄なしと云ふは、性善性惡まで溯りて始めて徹底したる説明を得べしと論ずる所以のもの他には非ず、性善性惡は實相の當面より溯りて其の元初を討究する方面なれば、これ緣起的の氣分を帶ぶるものと云ふべし、而して此に掲げられたる問題の無始なるものは勿論緣起的のものなれば、之を深く論究するに當りては、勢ひ緣起の氣分を帶ぶる性善

性惡まで溯りて討究し、遂に無始無明即ち性惡に厚薄なしと主張するものに非るなきか。蓋し緣起論の立場としては、唯だ自性清淨無自性のみを以ては諸法緣起の説明出來ざるべく無明妄法の緣に依りて始めて此に完全なる説明を得べく、從て無明妄法無始と雖も法爾自然に差別あるべきなり、されば緣起的の法門は一往の説明とも見ることを得べしと雖も、無始無明厚薄論に於てはその説徹底せりと云ふべし。又實相論の立場としては現象の當相を論究するを以て軸心骨髓を爲すものにして、敢て妄法の緣を借り來らざれば説明する能はずと云ふに非ざれば究竟の説明を得べしと雖も、若し緣起の氣分を帶びたる性善性惡迄を論究せんか、性善性惡そのまゝ修善修惡と發顯すべき筈なく、又何等かの緣を待たざるべからずして、矢張り緣起論者の如く一往の説明に陥るべし、是を以て台家の性善性惡説なるものは實は自己法門の自殺的主張なりと云ふべし、從て無始の無明を論ずるに於ても、無明妄法は法爾として差別あるべきものなりと論ずること實相論に契ふたる解釋なりと信す、何を苦んてか無始無明厚薄なしと論ずるや、甚だ解釋に苦む所也。



附記 古來馬鳴の出世年代に就て異説頗る多く、又起信論疏中眞偽未決のものあること、第一章序論中に多少述ぶる所あり、然るに此等に關する最近の研究としては、京都文科大學教授松本文三郎著「佛典の研究」(大正三年刊)あり、其中に、一、起信論に就て、二、起信論後語、三、起信論の譯者と其註疏の、三、章を擧ぐ、其の研究の結果は要するに、(一)馬鳴と脇比丘若くは富那奢と何等直接の關係なし、(二)馬鳴と迦膩色迦王との間亦無關係なり從て馬鳴が第四結集に興りしことなし、(三)馬鳴と摩訶哩制多マハトリチエタとは別人なり(四)起信論は作者不明の書なり、(五)起信論は龍樹以後の作なり、(六)起信論が馬鳴の作と考へられたるは賢首義記製作(西曆紀元約六百年代末頃)より遠く遡らざること、(七)起信論を眞諦譯するに就て疑ふべき餘地あり、(八)智愷の起信論疏、曇延疏、慧遠疏に就ては眞摺なりや否や甚だ疑はしく後人の作なるべし等と云ふにあり、詳細は該書に就て知るべし。

漢和  
兩譯  
大乘起信論新釋終

大正三年十一月七日印刷  
大正三年十一月二十日發行

不許  
複製

著者 湯次 榮

發行者 下村卯之助  
京都市五條通麩屋町西入

印刷者 須磨勘兵衛  
京都市北小路通新町西入

發行所 法林館  
京都市五條通麩屋町西入  
振替口座大阪七一七九番

社文弘所刷印



324

427



終